

ノースアジア大学国際観光研究

第 13 号



2020 年 3 月

 ノースアジア大学
NORTH ASIA UNIVERSITY
国際観光研究所

目 次

講演録

ノースアジア大学法学部国際観光学科「地域再生論」特別講演会
「地域再生への一考察」

佐 竹 敏 久 1

研究ノート

ユニバーサルツーリズム実現に向けた観光教育の実践

井 上 寛 17

活動報告

国際観光学科OB・OGとの懇談会、観光系企業による講演会・
ワークショップの開催

～国際観光学科生の秋田県内企業への就職促進のための諸施策～

横 田 恵三郎 27

第7回 高校生 私達のまちの観光魅力アップコンテスト

井 上 寛 37

角館武家屋敷通りにおける多言語アンケート調査

井 上 寛 47

留学生との国際交流事業

三 浦 薫 67

ノースアジア大学法学部国際観光学科「地域再生論」特別講演会
「地域再生への一考察」

〔講演録〕

ノースアジア大学法学部国際観光学科「地域再生論」特別講演会

「地域再生への一考察」

講 師 秋田県知事 佐 竹 敬 久

司 会 ノースアジア大学法学部
国際観光学科長 潤 森 威

日 時 令和2年1月24日(金) 11時～12時

会 場 ノースアジア大学40周年記念館 271番教場

瀧 森 ただ今より、ノースアジア大学法学部国際観光学科の専門科目「地域再生論」の特別ご講演会を開催いたします。本日ご講演いただきますのは、皆様、良くご存知の秋田県知事の佐竹敬久先生でございます。大変ご多忙の中、本学学生への講演のためにお越しくださいました。

僭越ながら、私から、佐竹知事の略歴をご紹介させていただきます。知事は、昭和22年に秋田県仙北郡角館町でお生まれになりましたが、大好きな坂本龍馬とお誕生日が同じでいらっしゃるそうです。秋田県立角館高等学校をご卒業され、東北大学工学部精密工学科にご進学、優秀な成績でご卒業されました。昭和47年3月に秋田県庁に入庁され、主に商工行政・地方行政関係を担当され、工業振興課長、地方課長、総務部次長を歴任されました。

そして、平成13年7月に秋田市長選挙にご出馬、初当選され、2期8年を務められました。また、その間に全国市長会会長等にも就任されました。その後、平成21年4月には秋田県知事選挙にご出馬、初当選され、3期連続当選も果たされて、現在は3期11年目でいらっしゃいます。また、多彩な趣味もお持ちと伺っております。

さて、本日は「地域再生への一考察」と題して、ご講演いただきます。それでは、佐竹知事、どうぞよろしくお願ひいたします。

佐 竹 皆さん、こんにちは。去年もこの講演会で、現代の観光の世界的な傾向と、秋田の状況についてお話ししましたが、今日は観光も含めた「地域再生」についてお話したいと思います。まず昨今、世間でも盛んに言われており、また先日も安倍総理からお話があった「地方創生」についてです。「地方創生」や「地域再生」、「地域活性化」、似たような言葉が沢山ございますが、実は少しずつ意味が違うのです。「地域活性化」、「地域再生」、「地方創生」、どこが違うのか、少し分かり辛いですね。実はですね、「地域活性化」というのはどこでも行われているのです。例えば、日本でも一番賑やかな、東京の銀座。あんなに賑やかな場所でも、商店街は「地域活性化」に力を入れています。東京でもどこでも、要するにどんな都会の人口密集地でも歓楽街でも、経

ノースアジア大学法学部国際観光学科「地域再生論」特別講演会
「地域再生への一考察」

済的な理由で住民や関係者は活性化に力を入れているのです。

一方で「地域再生」、または「地方創生」、これは都会ではなく、地方や地方都市の問題です。一般的には「地域再生」ですから、どちらかといえば地方の一地域を指します。「地方創生」というのは、やはり今、「東京」対「その他の地方」という構図、東京の一極集中に対するその是正を求める動き、この流れを「地方創生」と呼んでいると思います。ですから、「地域再生」の集合体が「地方創生」である、という風に捉えていただければ良いと思います。

さて、これから私が「地域再生」について様々なことを1時間ぐらいお話ししますが、それは学問的に論じるのではなく、市長、あるいは知事、その前には県職員として、今まで約50年近く、このような地域あるいは地方の活性化、「地域再生」、こういったものに実際に取り組んできた、その経験からお話しするのです。その経験則、それから、最近の私の知事としての職務柄、様々な世界や日本の情報を得ることが出来ますので、そういうことを題材に、経験に基づいた話をしますので、どうぞ気楽に聞いてください。

ただ、これから皆さんが卒業して、様々な所に就職する、あるいは自分で事業をする、ベンチャー企業を起こす、そういう時に、必ずこの「地域活性化」や「地域再生」の問題に、何らかの形で関わることがあると思います。特に観光は、正にいま日本で、「地域活性化」、「地域再生」、「地方創生」のための一番の手法の一つということになっています。また、この「地域活性化」という問題には、どんな仕事でも、日本中で、または日本企業ではなく海外に住んで働いていても必ず、どこかで関わることになると思います。

そういう訳で、私がこれからお話することは、皆さんがあなたが今学んでいることと、すぐにはリンクしないかもしれません、こういう話もあるんだな、将来役に立つかもしれない、と思って聞いていただけると幸いです。

さて、「地域再生」についてですが、歴史的に見れば地域というものを意識しているのは農耕民族です。農耕民族というのは、ある土地

にいろんな物を植えて、そこから収穫を得て生活しています。あちらこちらに移り替わって住むという、そういう民族には、地域とかエリアといった発想はないんですね。どちらかというと、狩猟民族は獲物がある場所を求める、獲物を追って移り住みます。狩猟民族には自分の定住する家、土地がないのです。これは、昔の話ですがね。つまり、農耕民族は必ずどこかに定住する、狩猟民族は定住する場所がない。ただ近代以降の社会においては狩猟民族も世界中のあちらこちらを移動して歩くということが出来ませんので、定住化していきます。また自給自足の社会においては、各々役割分担があります。例えば、昔アメリカではバッファローがたくさんいて、今は激減しましたが、当時はバッファローを追って人間が移動していました。ただ、現代では食料としてはほとんど野生の動物を食べませんね。牛も豚も鶏も、野生ではなくて全部、家畜です。昔は狩猟民族でも、今ではどこかに定住してそういう家畜を飼育するようになって来ています。

現代では世界中、遊牧民族のように移住して歩く、住まいを転々として歩くということはほとんど出来ません。ですから、自分たちの定住する地域というものが非常に重要になってくるわけです。ゆえに、この「地域再生」、「地域活性化」、これは世界中どこに行っても必ずついて回ります。日本だけではなく、海外でも、その地域が何らかの理由で人口が減ってきた、あるいは地域産業が衰退する、そういうことは必ずあります。つまり、「地域の再生」や「地域の活性化」というものは、正に世界的な課題だと言えるのです。

その中で一番ですね、これを言う人はあまりいませんが、トランプ大統領が、最高の「地域再生」を実現しつつあると私は考えています。選挙における一番の公約に掲げて、やり方に関しては賛否両論ありますし、非常に強引ですが、ただ「地域再生」という点では最も効果を上げたのはトランプ大統領だと私は思います。何故かと言いますと、かつてのアメリカは、例えばミシガン州のデトロイト周辺におけるフォード・モーター社をはじめとする自動車産業、あるいはミズーリ州、カルifornニア州における農業や牧畜業等、様々な分野での産業

ノースアジア大学法学部国際観光学科「地域再生論」特別講演会
「地域再生への一考察」

振興を成し遂げた、世界で一番豊かな国でした。ところが、近年では日本においても様々な分野の工業が進展し、あるいは今度は中国が様々な分野で台頭し、例えば自動車等でも、日本からも、ヨーロッパからも、中国からもどんどん輸出されるようになりました。その上、アメリカの基幹産業である自動車産業、あるいは鉄鋼業、そして農業等に、多くの移民が従事するようになってきました。不法移民も含めて、メキシコの方から非常に多くの移民が流入しており、彼らは生活のために低賃金でも働きますから、元々その地域に住んでいた住民達の働く場を奪ってしまっていったのです。

アメリカのかつて栄えた、世界でも有数の工業地帯、農業地帯が非常に衰退してしまいました。正に、これを元に戻そうとしたのがトランプ大統領です。いわゆる「地域再生」ですね。このことを声高に、そして日本のように緩やかに少しづつではなく、相当の摩擦、世界との摩擦を恐れずに進めています。アメリカ第一主義ということで批判もされていますが、これを上手く利用して米中貿易摩擦では相当強気な対応をしています。日本に対しても貿易交渉では、かなり厳しいことを言っています。また、ＴＰＰからの脱退なども全て、突き詰めて考えてみると、アメリカの「地域再生」を目指しているのです。ですから、正にドラスティックに、あるいは強硬に、ある意味では手段を選ばず、アメリカの地域を再生するんだぞという、この一点であれだけ色々な問題があっても人気があるのです。

アメリカの景気は今、非常に良いですね。ニューヨーク株価も非常に高いです。ですから、なんとなくアメリカというと「地域再生」、「地域活性化」とは関係がないように見えるけれども、実は世界で一番そのような方向性で成功し、そして人気があるのはトランプ大統領です。ただ、日本もそれで良いかというと、難しいです。やはりアメリカは資源、エネルギー資源があります。今回、アメリカはイランとも衝突しました。以前だったら、出来なかつたでしょう。以前は、アメリカもエネルギー資源を、石油や天然ガス等を相当海外に、主に中東に頼っていました。今は、アメリカ国内で石油、天然ガス、シェールオイル

等、全ての資源が自給できますので、相当な摩擦を恐れずにあんなことが出来るのです。日本では、安倍総理が地方の人口減少を憂慮し、「地方創生」を掲げて努力していますが、そのためにアメリカと同じようなことをやつたら、日本はエネルギー資源や、食料資源がないですから、世界中からそっぽを向かれたら我々は生きていけません。

ですから、どこの国もできる、ということではありません。そういうふうに大きく考えますと「地域再生」というものには国の全体の力が、最後には関係してくるということです。そういう状況にありますが、もう少し身近な問題で考えてみると、日本では東京の一極集中、秋田県では秋田市の一極集中がやはり問題になってくると思います。皆さんの中にも秋田市以外から通学している学生さんもおられるでしょうが、昔は自分の町に商店街があったが、今はシャッター街になってしまっているという地域もあるかと思います。昔は農村部にもたくさん人がいましたが、今はお年寄りばかりで若い人はほとんどいません。これをどうにかしなくてはならないと、日本では「地域再生」、この「地域再生」を全体的にまとめたものが「地方創成」ということで、日本各地で様々な取り組みが今、行われています。それに対して、国では「地方創成」のための事業予算を年間1.8兆円程度組んでおり、県や市にも「地域再生」のために事業をしてくださいということで補助金が来ます。しかし、なかなか上手くいきません。これが、非常に難しいのです。何故難しいのかと言うと、昔と今では、様々なことに関する社会認識が全く違うからです。

昔は、自分のエリア、自分の居住地域以外の人々との接触が少なく、どちらかと言うと地域完結型でした。その地域で自給自足の生活を送っていた人々が多かったのです。その地域で生活し、仕事をし、結婚もして、というように社会生活が全部出来てしまっていました。情報通信も今のようには発達していませんでした。また、戦前までは、行政も地域も封建的な社会だった、とも言えると思います。目上の人の権威は強く、集落でも家でも、こうしなさいという上からの指示には、ほぼ従わなくてはならなかったのです。個人の考え方というものが

ノースアジア大学法学部国際観光学科「地域再生論」特別講演会
「地域再生への一考察」

出せなかったのですが、地域としては良くまとまります。今は、あくまでも気をつけて発言しないと、すぐにセクハラとかパワハラとか言われてしまいます。昔は、ある集落で若い男性と女性がいたら、その地域の有力者が「お前のところの息子とあの家の娘さんを結婚させなさい」と親御さんに話すと、今と違って昔は親の言うことを聞かざるを得ないので、その通りになったわけです。結婚しなさい、子供を沢山生みなさいと言われても、皆、従わざるを得なかつたわけです。

そのような強制力が働いて、その地域は人口も維持できていました。ところが今の世の中では、そんなことしたら、すぐに批判されてしまいます。親御さんや地域の有力者が「あの男の人とあの女人を結婚させなさい」とか、「結婚したら、子供を3人以上生みなさい」とか、そんなことは決して言えません。昔の時代と違って、今は全て個人の自由ですから、自分の好みで結婚し、自由な考えで行動します。そうすると、情報化社会なので、より望ましい、自分の希望が叶う所に行こうとするのが当たり前です。そういう認識を持っています。だから、なかなか上手くいかないのです。

政府も県も市も婚姻率を上げようとして、様々な婚活パーティーを行っています。ですが、そこまでです。婚活パーティーを開催しても、まさか、「そこのあなたとあなた、ぜひ結婚してください」とまでは言えません。あくまでも若者たちの自由意志を尊重しなくてはなりません。最近、私は結婚式に招かれた時も気をつけています。昔は、結婚式に行くと必ず、お祝いの言葉で「早く子供が授かるといいですね、出来れば3人くらい」と話していましたが、今これを言うとセクハラです。また、昔と違って子供の教育に大変お金が掛かる、ということもあります。子供を何人も産んで、その子達が皆、大学に行ったら大変ですよ。お父さんお母さんが、子供を大学に入れるということは、本当にお金が掛かるんですよ。いっぱい子供を産んで、3人も4人も産んで、皆大学に行ったら大変です。昔は大学に行く人は、極端に言えば、5人兄弟がいれば長男だけが行く、これが普通でした。今は、長男か次男か、なんて関係ありません。ようするに、社会自体が大き

く変化してしまったのです。

また、景気が良い時期には「地域再生」についてさまざまな事業が行われ、上手くいくこともありました。「地域活性化」や「地域再生」という使命があり、この使命を上手く活用して、物を売ることが出来ました。ところが、現代の経済はグローバル化が進み、言ってみれば世界連結型であり、他国との繋がりが強く、経済的にも他国の影響を受けやすくなっています。ですから、もしリーマンショックのような大変な不況になれば、どんなに頑張っても物は決して売れません。世界がどんどん不況になれば必ず自国の経済に影響します。要するに、自分たちの力ではどうしようもない、そういう非常に大きな力が時々働くようになってしまいました。どんなに立派な良い物を作っても、世界的に見て日本の経済が下降すると、つまりは不景気になると決して売れないのです。だから、いくら地域を支えていこう、といってもなかなか難しいのです。

「地域再生」というのは必ず、誰がやるのかが問題になってきます。何となく集落の人々が集まって、うちの集落が最近元気ないから賑やかにしよう、何かやろうと話をします。しかし、誰がやるのか、なかなか手が上がりません。何事も組織は、地域でも、企業でも、団体でも、全て人、人材なんです。ところが問題は、その人材の確保が今、非常に難しいのです。そこで、これから正に様々な組織、地域、団体、そういうところに皆さんのが入って行くことになります。正に今、大学で学んでいる皆さんが、です。「地域活性化」や「地域再生」が出来るのは、今その地域にいる方々ではないですよ。何故かというと、衰退する地域、そこに良い人はいます。人柄が良い、その地域の歴史を覚えておられる方々は沢山いらっしゃいます。要するに、社会は変化して、高度情報化社会、高度技術社会、格差社会、あるいは先程述べたように世界連結型社会になって来ています。そうすると、世界の情勢や、その中での日本の動向、といった様々な動きや、最近では特に情報産業、情報化、こういったことをしっかりと知識として持っていないと「地域再生」なんて出来ないですよ。しっかりととした知識を

持っていないと「地域の活性化」は出来ないです。

そして、衰退するような地域にはそういう人はいませんよ。いれば、そこは衰退しません。要するに、これから「地域再生」を行うのには、個性的な感覚を持ち、相当な地域の特色を理解し、情報化など、様々な知識を持った人でないと全く出来ないです。ですから、良く「地域再生」には「よそ者、馬鹿者、若者」、この三つが必要だと言われています。その地域にそういう人がいれば元々衰退しないですよ。誰も考えもしない、何となくまとまって、「困った、困った」、「自分の所には何もない」と言っています。たとえ良い市民がいて、良い観光資源があっても、SNSで発信する技術がなければ観光客が増えるわけがありません。また、そういう所に行って何かをしようとする「昔はこうだった」、「うちの町にはそれは合わない」と必ず抵抗があります。そのような抵抗を乗り越えて、熱意を持って一生懸命、その地域に夢中になって、ある意味馬鹿になれる人が必要なんです。そしてまた、年を取ると自然と根気がなくなる、新しい知識を吸収する能力も希薄になりますから、やはり若者の力が必要になるのです。

「地域再生」に成功している所で、その地域の人だけで取り組んでいる所はほとんどありません。誰か異質な人が入っているか、あるいはその地域に定住はしなくとも定期的に訪れてサポートしてもらう、有益な情報を貰っている等です。今、秋田にも移住者が増えて来ています。年間400人から500人ぐらいです。東京に、県の移住センターが幾つかありますが、その移住センターを通してです。また、市町村によっては縁故で来られる方がおられますが、相当移住者が増えて来ています。秋田県から出て行く人の数と秋田県に入って来る人の数の差が、毎年4千人ぐらいです。これが昨年は4千人を割りました。出行く人の数はそう減っていませんが、移住者の数が増えたのです。そして、移住者が様々な所で「地域再生」に関わっています。上手く関わっている所は良いのですが、そうではない所もあります。

安倍総理が演説で島根県に移住したパクチー農家の人の例を挙げて、政府の移住政策、「地方創生」は上手くいっていると言っています。

したが、実はその人はもうその地域にはいません。上手くいっている例は色々出て来ていますが、なかなか上手くいかない例もいっぱいあるのです。これは地域によって風習が違う、あるいは価値観が全然違う、ということがあります。それを地域の人々が受け入れるかどうかです。秋田の田舎に行くと、非常に人柄が良い人が多いですね。これが何かあっておかしくなると、移住者との関係が変になってしまうのです。実際に県南であった例ですが、移住者と話をしたら、「気持ち悪い」と言われてびっくりしました。庭に洗濯物を干していたところ、雨が降ったので隣の家の人が親切で全部取り込んでくれたのだが、女性の下着が含まれており、それも取り込まれていました。都会の人から見れば、女性が下着を他人に取り込んでもらうという経験がない訳ですから、いかに親切でも「嫌だ」と言っていました。そこまでやるとお節介すぎるわけです。こちらは非常に親切な気持ちでやっていても、あちらはそうは取らないのです。この価値観の違いが広がると、この地域は「嫌だ」となって戻ってしまうわけです。こういう事例が結構多いのです。

都市部の町内会や地域の行事への参加は個人の自由ですが、地方に来ると行事は必ず各家に割り当てられます。祭や運動会などは全部、分担して行います。東京に住んでいると町内会の行事などほとんどありません。ところが、こちらでは日曜日にゆっくり休みたいと思っていたら、町内会からの割り当てで、朝6時から起きて行事の受付をしなくてはならない、ということもあります。お互いに、どこまで許容するかが大きな問題となっているのです。非常に難しいです。3年ぐらい住んで良い雰囲気になると定着することが多いです。移住者が増えたと言っても、すぐにいなくなる人が沢山います。価値観の違いからです。ただ若い人はまだ柔軟ですが、お年寄りは自分の価値観で固まっている場合もありますから、「よそから来て、集落のルールに従わない。あいつは、何だ」となってしまうのです。こうなってはダメです。地域に良き理解者、相談者がいると、移住者は定着しやすいです。

ノースアジア大学法学部国際観光学科「地域再生論」特別講演会
「地域再生への一考察」

「地域再生」に必要なのは、よそから来る人には高度な知識や情報を提供してもらい、地元の価値観・しきたりを強制しないことですね。長い間、お互いにまあまあの関係でやっているとだんだん上手くいくものです。よそから来た人は、「まあ、そんなものか」と思い、地元は強制しないで温かく見守る、ということです。そうすると、そのうちお互い打ち解けていきます。県内でも、上手くいく町と上手くいかない町があります。大きな差があるのですが、実は観光客がたくさん来る所は上手くいき、減多に来ない所は上手くいっていません。観光地は様々な地域から多くの人々が来ますし、習慣も好みも言葉も全て違います。そのような観光地の住民は、日本各地や海外の方々の習慣等を覚えているので、自分と価値観が異なることを許容できるようです。一方、観光客が来ない地域の人々はいつも自分の仲間と生活しているので、移住者というよその方が来ると何となく拒否反応が出る、そこがやはり違うのです。

もう一つは、「地域再生」には目標が必要です。何となく「地域再生」というと、お年寄りは昔に戻ろうと考えます。「昔は、うちの集落は人口が300人で、みんな非常に仲が良くて、日曜日になると皆で集まって、お酒を飲んで楽しかった」「お嫁さんも、同じ集落の中で、あるいは隣の集落の中からもらって、うちに嫁いで来た」というようにです。ですが、もう元には戻りません。昔のように、人口が増えることはまずないです。というのは、昔のようにしようとするのは「地域再生」ではないのです。今置かれた状況の中で、その地域をこのままどうやって維持していくのか、あるいは維持するためには、どんなアクションをするのかです。その結果、現状よりも前向きに、今よりも良い状態の地域にする、これが「地域再生」です。

郡部に行くと、「何と知事さん、人口減った。昔は300人いたけれど、今は200人だ。あと100人、何とかしてけれ」と良く言われますが、これは絶対に無理です。広域では、広い範囲では、人口の増減等はあると思います。でも、集落や小さい地域社会で、これを昔に戻すというのはまず出来ません。では、「地域再生」と言うけれど、一体何をす

るのか。例えば、人口は減っても、その地域の住民が暮らしやすいように、もう少し町の集落の道路等を直して、皆さんのがバリアフリー、あるいはバリアフリーまでいかなくてもスムーズに動けるようにするということを考えられます。こういう問題でしょうか。あるいは、ここに地域の農産物があります。これをどうやったら、特産物にして高く売れるのか、考えることも出来ます。また、その地域に昔からの神社があるとします。その地域の神社を上手くパワースポットとして宣伝して、観光に役立てよう、もう少し観光で人を呼ぼうとか、色々考えられるわけです。

つまり、「地域再生」には明確な目標と計画が必要です。何をやるか、誰がやるか、どういうふうにやるのか、明確に決めないと、まず無理です。また昔の、その地域の、自分たちの価値観で色々なことを決めてやっていくということは、やや難しい、失敗する可能性が高いのです。以前、ある集落というか、ある町に行きました。その町の中年のお母さんが、秋田の農作物を使って、大変美味しい定食を作っていました。秋田県産の物尽くしの定食で、栄養のバランスも取れていて、そんなに田舎っぽくなく、都会的なセンスもある食事でした。お母さんの農家レストラン、という感じで結構売っていました。そこまでは良かったのですが、何を考えたのか、東京に店を出すことになりました。ところが、東京でこの値段でいいんですか、という価格で定食を出しました。そうしたら、東京でそんな値段でやつたらね、安いから、いっぱい人が来るでしょう。これが間違いました。東京でそんな値段でやっても、東京のお店のテナント料は大変高いですよ。その方はもともと自分の住んでいた町の共同店舗の一角を借りて、食堂をされていたのです。その感覚で東京に行きますとね、東京の店舗のテナント料は以前の店舗の賃料の5倍、10倍ですよ。同じような値段で料理を出したら、すぐ破産ですよ。こういう例が結構あるのです。

ちろん東京に長く住んでいて、秋田の料理を提供して、成功している人は結構います。秋田から行って出店する、これが非常にまずいことが多いのです。テナント料が大変高いから、秋田で提供する物と同

ノースアジア大学法学部国際観光学科「地域再生論」特別講演会
「地域再生への一考察」

じ物を3倍から5倍の値段で提供するとします。しかし、3倍、5倍の価格をつけた料理を、秋田と同じような形で提供しても、あちらの人も食べに来ませんね。都会で高価な食事を提供するには、中身は同じでも、例えば茶碗や箸を、高級な物を使う、飾りつけを都会的にする、そういう工夫がないといけません。秋田県産の物だけ持って行って、これが5千円ですと言っても、誰も食べに来ません。これですね、非常によそを知らない、自分の地域の常識は東京では通じない、これが分かっているかどうかなんですね。

「地域再生」のために、特産品等を東京に売ろうとする時、このような違いが分かっていないと上手くいきません。ですから、先程言った通り、いろんな周辺の知識が必要なのです。上手くいっている所は、東京で秋田牛を提供している、一番良い店なんですが、なんと8万円です。だけど、東京の銀座の高級店では8万円は当たり前です。だから、成功するんです。「こったもの、8万円!?こったものだば、秋田では8千円だ」でも、8千円のステーキでは誰も来ません。銀座では誰も来ないです。また、そんなことやったら、テナント料でつぶれてしまうんです。だけど、8万円のステーキコース、出し方が違うんです。秋田では普通の出し方ですが、銀座に行くと高級感があつて、食器はウエッジウッド、ワイングラスやビールのグラスはバカラというふうに、提供の仕方が超一流なのです。食べる物は同じでも、フォークとか、グラスとか、食器等を超高級にする、そうしますとね、8千円が8万円になってしまうのです。

このような知識や今の相場、あるいは都市部の住民の所得の状況、そういうものをしっかりと見て活用できる人は、地域ずっと暮らしている人より、東京等の都会で生活したことがある人ですね。東京の暮らしを覚えている人が、秋田に帰って来て、自分でそういう商売をすると成功することが多いです。いずれにせよ、これから「地域再生」というのは、単に情熱、材料、様々な思い入れ、といったものだけでは成功しません。非常に戦略的であり、知識、情報力が大切です。この情報力については、我々よりも、あなたがた若い方々の方が、

一番発信の仕方がわかっていますね。

観光も同じです。今、どのような状況かというと、良い景色がある、これだけでは観光の対象にはなりません。自然環境だけでは観光の対象にはならないのです。今の流れは、アクションです。天然の環境のままでは、リピーターも飽きてしまうからです。例えば、県北ではそば打ち体験などを行っています。昔は観光に来て、何かを見るだけでも良かったのですが、今の若い人たちがそこに行って何かがしたいのです。例えば、市役所のホームページでは、田沢湖はどういうところを紹介しています。しかし、美しい景色はどこにでもあります。それよりも、祭りです。自分でその中に入っていく、自分で祭りの一員になる、そういうことが求められているのです。

今、中国の武漢市等ではコロナウィルスによる肺炎で大変なことになっていますが、中国から来る観光客は若い人々が多いのです。超富裕層はヨーロッパへ行ってしまいますから、日本を訪れる中国からの観光客はだいたい50歳以下、30代から40代が多いのです。30代から40代の観光客に、昔のお寺ばかり見せても面白がるはずがありません。ですから、何かをしてもらう、アクションが大切になってくるわけです。何の情報もなく、ただ秋田に来る人に、（特産品である）いぶりがっこを売ろうとしても買うはずがありません。誰を、どういう年代を対象として、どういう戦略で売るのか、しっかりと考えなくてはなりません。

要するに「地域再生」というのは、世界的な流れ、地域の様々な要素を踏まえて、誰がどういう役割を受け持つのか、目標をどうするのか、現場からフィードバックして軌道修正できるのか等の、緻密なプランニングがあって初めて出来るものです。日本中には様々な成功例があります。もちろん、観光を中心とした「地域再生」の事例もありますから、インターネットで検索したり、実際にその場所に行ってみてください。成功例も失敗例もあります。良く言われることですが、最初にいきなり成功したところはあまり上手くいかないことがあります。どんなところでも最初から簡単に成功しません。最初はあまり手

ノースアジア大学法学部国際観光学科「地域再生論」特別講演会
「地域再生への一考察」

応えがなく、しかし後の方になると大変良くなつていったというような事例の方が長続きするようです。成功例として、日本中から視察団が大勢来た、しかし、3年後に行つたら廃墟になつてゐた、というようなこともあります。要するに、「地域再生」というのは、時間がかかります。3年後、5年後どうなつていくのか。地域によって、その状況は様々であり、今の状況だけでなく、いつから始まつて今どういう状況なのか、しっかり研究、勉強していく。そこから、学ぶことはたくさんあります。

ぜひ皆さんも、春休みに身近なところで良いので、「地域再生」の成功例を見て来てください。インターネットで検索すれば、「地域再生」の成功例は数多く見つけることができるでしょう。実際に、その場所に行ってみることが一番の勉強になります。

どんなことをするのにも、一定の知識、一定の基礎知識と行動力が大切です。また、ここにいらっしゃる方々の出身地は様々でしょう。つまり、様々な地域の違う情報をお互いに交換できるということです。自分の生まれたところをスタンダードだとは思わないでいただきたい。スタンダードは、「地域再生」にはないのです。地域によって、全部違う、違うところをどう意識して、そこに入り込むのか。違いを認めながら、どういうアクションを起こすのか、どういうプランニングをするのか、それが大切です。どういう企業に行っても、地域との関係は必ずあります。私は会社員だから関係ない、ということでは通用しません。会社がどこで仕事をするのかによって、地域との関わり合いは必ずあります。地域性の違いをしっかり頭に入れながら、そこに自分の仕事を落とし込む、そういうことが出来れば会社員としても上手くいくでしょう。

とりとめのない話ばかりでしたが、ぜひ春休みになつたら先程話したような場所を訪れて、勉強してほしいと思います。時間になりましたので、これで終わります。ご清聴ありがとうございました。

瀧 森 佐竹知事、どんどん吸い込まれて行くような、貴重なお話をいただきました。誠にありがとうございました。せっかくの機会ですので、本学学生から質問させていただきたいところですが、大変お忙しい中、おいでいただいております。この後のご予定もおありとのことで、これでご講演を終わりにしたいと思います。

学生の皆さんには起立してください（学生が全員起立する）。

本日は、大変お忙しい中、本学学生のために貴重なお話をしていたき、誠にありがとうございました。改めて、拍手で感謝の意を表したいと思います。佐竹知事、誠にありがとうございました。

〔研究ノート〕

ユニバーサルツーリズム実現に向けた観光教育の実践

井 上 寛

はじめに

ユニバーサルツーリズムとは、「すべての人が楽しめるように創られた旅行であり、高齢や障害等の有無に関わらず誰もが気兼ねなく参加できる旅行¹⁾」と観光庁が定義している。また、2018年11月にはバリアフリー法が改正され、基本理念として、国と国民の責務に「高齢者や障害者などに対する支援」も明記されるなど、制度面の整備も着々と進められている。これらは、2020年7月下旬から開催される予定の「東京オリンピック・パラリンピック2020」に向けたうごきでもあり、その指針として2017年2月には「ユニバーサルデザイン2020行動計画」も政府より発表されている。この計画では、国民の意識やそれに基づくコミュニケーション等個人の行動に向けて働きかける取組である「心のバリアフリー」分野と、ユニバーサルデザインの街づくりを推進する取組である「街づくり」分野が共生社会の実現に向けた大きな二つの柱として提示されている。

前者の「心のバリアフリー」について、同計画では「様々な心身の特性や考え方を持つすべての人々が、相互に理解を深めようとコミュニケーションを取り、支え合うことである。そのためには、一人一人が具体的な行動を起こし継続することが必要である。²⁾」と述べられており、拙稿（2018）において、なぜこの時期に「心のバリアフリー」が前面に打ち出されたのかについて考察した。さらに拙稿（2019）では、東京オリンピック・パラリンピックに向け、どのようにしたら観光の視点から「心のバリアフリー」の教育を展開することができ、その結果としてユニバーサルツーリズムを実現に資するのかについて、筆者が担当している「観光福祉論」の授業内容からの検証を試みた。

一方後者の「ユニバーサルデザインの街づくり」について、同計画では「世界に誇ることのできるユニバーサルデザインの街づくりを目指して、更なる取り組みを行う好機である。」と述べている³⁾。この中で、具体的取り組みについても言及されており、「開催都市東京のみならず各地におけるバリアフリー水準の底上げを図り、東京大会のレガシーとして残していく」としている⁴⁾。

超高齢社会への対応や訪日外国人観光客の地方への誘客は秋田にとっての喫緊の課題であることは周知の事実であり、筆者は、前述の「心のバリアフリー」を含めたこれらの観点を踏まえた観光教育を実践する方法はないか模索していた。そこで、筆者が担当した初年次教育の授業科目である「学生生活入門Ⅱ」の学修内容として設定した「観光フィールドワーク」の研究テーマを、本年度は「秋田駅周辺における観光旅行者の利便の増進に関する実態調査」とした。本稿では、その授業内容を検証したうえで、国際観光学科の学生にユニバーサルツーリズムを実践的に学修させることはどのように観光教育に資するのかについて考察する。

1. 観光フィールドワークの概要

本学法學部国際観光学科のカリキュラムでは、「学生生活入門Ⅰ」(前期)と「学生生活入門Ⅱ」(後期)が各2単位必修科目として設置されている。この科目は1年生の初年次教育を目的として設置されている科目であり、①主体的な学びの姿勢の育成、②基礎的スタディスキルの修得、③生活指導ならびにキャリア・サポートの3点を学修テーマとしている。したがって、この観光フィールドワークは「ユニバーサルツーリズム」を専門的に学修することを目的とした授業ではなく、本来はスタディスキルとしての「観光フィールドワーク」を学ぶための手段として位置づけられる。しかし、国際観光学科の学生の多くは卒業後に観光業界での就職を目指しており、前述した超高齢社会や外国人観光客への理解や対応を職業生活や社会生活の中で求められることは必至である。

したがって、1年生の段階でこれらを「課題」として認識したうえで、観光インターンシップなど実践的なキャリア教育につなげていくことが有益なのでないかと考えた。

さて、前述したように、今回の観光フィールドワークにおける学修テーマは

「観光旅行者の利便の増進に関する実態調査」である。観光立国推進基本法第21条には「国は、観光旅行者の利便の増進を図るため、高齢者、障害者、外国人その他特に配慮を要する観光旅行者が円滑に利用できる旅行関連施設及び公共施設の整備及びこれらの利便性の向上、情報通信技術を活用した観光に関する情報の提供等に必要な施策を講ずるものとする。」と謳われている。このことを踏まえ、「秋田駅周辺において、これらの対応は具体的にどのような状況になっているのか」という問題設定をし、これらの観察項目を(1)設備のバリアフリー化、(2)多言語対応、(3)不便が予想される部分、(4)その他に分類したうえで、筆記や写真の記録により調査を実施する方法をとった(図表1)。

図表1 観光フィールドワークにおける観察項目

観察項目	内 容
設備のバリアフリー化	通路の段差解消(スロープなど)、手すり、エレベーター、エスカレーター、音声案内、点字板、誘導ブロック、多目的トイレ、扉、自動販売機、券売機、公衆電話、コインロッカー、案内標識など
多言語対応	案内標識など外国人に向けた多言語対応について 外国语の種類やピクトグラムなど
不便が予想される部分	障害者、高齢者、外国人の旅行者が不便であると予想できる部分について
その他	観光パンフレットの状況 スタッフの外国人への対応状況

(筆者作成)

2. 観光フィールドワークに関する授業内容

学生生活入門Ⅱにおいて、観光フィールドワークに関する授業を、2019年10月18日から11月5日まで金曜日の1時限(9時から10時30分)に5回実施した(図表2)。各時間の学修内容について概観しよう。

(1) ユニバーサルツーリズムの理解(2019年10月18日)

本研究テーマへの導入として、筆者が作成した教材スライドを使用し講義形式で授業を行った。ユニバーサルツーリズムの定義、「障害の社会モデル」の

理解⁵⁾、社会に存在する「4つのバリア」⁶⁾、「ユニバーサルデザイン2020行動計画」、「バリアフリー法」についてそれぞれ確認した。その上で、今回の調査に含まれる、上下移動のバリアフリー、駅の券売機やトイレなど設備利用でのバリアフリー、店舗や施設でのバリアフリー、外国人向け多言語対応、岐阜県高山市「福祉観光都市」の事例⁷⁾などを画像で紹介し、前述の観光立国推進基本法第21条の条文を確認した。また、なお、資料の一部は、国土交通省(2018)が作成した中学生向けの教材から引用して紹介した。

(2) 観光フィールドワークの手法・調査の準備 (2019年10月25日)

授業の前半では、フィールドワークの手法について講義形式で授業を行った。大学教育におけるフィールドワークは、学外で実施する単なる「見学」であつてはならない。つまり「社会調査」を実施する必要があると筆者は考えている。社会学小辞典によれば、社会調査とは「一定の社会または社会集団における社会事象に関して、科学的に現地調査により直接的にデータを収集し、記述（かつ分析）する過程、およびその方法をいう。⁸⁾」と定義されており、今回はそのプロセスを短時間で学生に理解させる必要がある。今回は初年次教育としての導入部分ということであるから、憶測や想像といった主観ではなく、一定の尺度でデータを収集する技法を学ばせることに重きをおき、社会調査の一技法である観察法⁹⁾を実施することとした。今回は、調査技法に関しては簡単なレジュメを配布して説明した。授業の後半では、筆者があらかじめ決定したA～Fまでの各4名のグループ計6チームをくじ引きにより組成した(図表3)。発表後グループごとに役割分担を行い次週のフィールドワークに備えた。

(3) 観光フィールドワークの実践 (2019年11月1日)

当日は、午前9時に秋田駅東口「拠点センターアルヴェ」1Fに現地集合とした。その後、A～Fのグループごとに各調査地点へと出発した。なお、各調査地点を管理している自治体、企業および団体には事前に連絡し、調査の趣旨を説明したうえで許可をもらった。なお、商業施設では写真撮影が禁止されている箇所があり、学生には撮影しないように注意を徹底した。各グループとも、調査地点において前述の方法で記録をとり、1時間ほどでフィールドワークを終了した。

(4) 調査データのまとめ（2019年11月8日）

フィールドワークで収集したデータ、すなわち写真や記録を各自が持ち寄り、プレゼンテーションソフトを使用し、グループごとに発表用のスライドと発表原稿を作成する作業を行った。

(5) 調査結果の発表（2019年11月15日）

今回の発表で意識して学生に要求したのは、観察調査で収集した「事実」をデータとして記録し、それらを正確に発表することである。つまり、社会科学の領域である学問としての観光について、客観的なデータと主観的な感想や意見を分離して考察する訓練を促すことをねらった。各グループの発表において学生は、エレベーターや手すり、誘導ブロックなどの設備や案内表記を撮影した写真をもとに調査からの知見を発表した。学生の発表を総括すると、各調査地点において、障害者や高齢者に向けた設備面でのバリアフリー設備は充実している一方で、英語以外の多言語表記が不足しているという結論に至った。なお、今回の発表はグループ単位で実施したので、各自にレポートの提出を求めた。

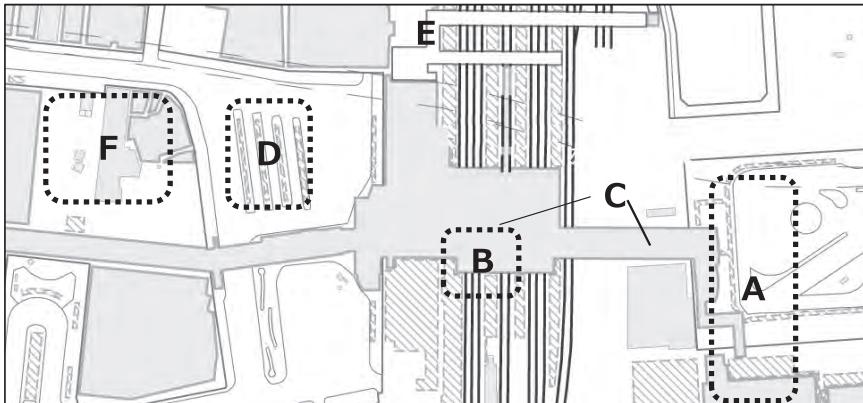
図表2 観光フィールドワークに関する授業内容

回	日 時	内 容
1	2019年10月18日	ユニバーサルツーリズムの理解
2	2019年10月25日	観光フィールドワークの手法／調査の準備
3	2019年11月1日	観光フィールドワークの実践(秋田駅周辺)
4	2019年11月8日	調査データのまとめ
5	2019年11月15日	調査結果の発表

図表3 各チームの調査地点

チーム名	調査地 点
A	拠点センターアルヴェ、秋田駅東口バス乗場と周辺道路
B	秋田駅観光案内所、秋田駅待合室
C	東西自由通路(ぼぼろーど)、JR秋田駅中央改札周辺
D	秋田駅西口バス乗場、周辺道路
E	駅ビルTopicoの入口付近、東西連絡歩道橋(wエロード)
F	買物広場周辺、フォンテ秋田

図表4 調査地点の位置（アルファベットは各チーム名）



出典：地理院地図（電子国土WEB）を筆者が加工して作成

3. 指導内容の検証

今回の授業を終え、(1) 観光フィールドワークに関する理解、(2) ユニバーサルツーリズムに関する理解、(3) 心のバリアフリー教育の3点から、反省点を踏まえ検証したい。

(1) 観光フィールドワークに関する理解

社会科学の学問領域にとって、とりわけ実学が重要視される観光を学ぶ学生にとって、社会調査を含むフィールドワークの実践方法を学ぶことは極めて重要である。なぜならば、企業や行政など卒業後の進路においてこれらを実践する場面が想定されるからである。発表やレポート等を見る限り、「事実について一定の尺度で収集する」意義を若干でも理解できたのではないだろうか。しかし、調査法としての写真の撮影方法や記録の取り方はまだまだ不十分である。

(2) ユニバーサルツーリズムに関する理解

今回の授業では、「ユニバーサルツーリズムの定義」「障害の社会モデルの理解」「社会に存在する4つのバリア」「ユニバーサルデザイン2020行動計画」「バリアフリー法」の各内容について、短時間で概念や法律、制度を概観するにと

どまっており、学生にその本質を理解させるためには時間不足であったのではないか。また、バリアフリー法に基づき策定された「秋田市バリアフリー基本構想¹⁰⁾」についても、いま一歩踏み込んだ指導が必要であった。

(3) 心のバリアフリー教育

冒頭で提示した「行動計画」では、各人が「心のバリアフリー」を体現するポイントとして3点をあげており、そのうち、障害のある人への社会的障壁を社会の責務であるという「障害の社会モデル」を理解すること、自分とは異なる条件を持つ多様な他者とコミュニケーションを取る力を養い、すべての人が抱える困難や痛みを想像し共感する力を培うこと、の2点が今回の指導内容に該当する¹¹⁾。

前者の「障害の社会モデル」の理解については、フィールドワークを通して、さまざまなバリアが存在し、それらは社会が作り出したものであることを各自が自分の目で確認できたことが大きな成果である。

後者の後半部分にある「すべての人が抱える困難や痛みを想像し共感する力を培うこと」について、今回学生実施した調査項目のうち「不便が予想される部分」がこれに該当する。前述した「客観データの収集」とは相反する部分とも捉えられるが、感性を養うことも観光を学ぶ上では重要であり、学生の知見からも、案内表記における多言語対応の不足が指摘されていることから、完全とは言えないまでも一部は達成できたのではなかろうか。

4. おわりに

2016年3月30日、明日の日本を支える観光ビジョン構想会議において、「明日の日本を支える観光ビジョン」が決定した。訪日外国人旅行者数4,000万人、訪日外国人旅行消費額8兆円、地方部での外国人延べ宿泊者数7,000万人泊といった目標値が設定され、「すべての旅行者が、ストレスなく快適に観光を満喫できる環境に」という視点も掲げられた。一方、令和元年版「高齢社会白書」によれば、全国一位である秋田県の2018年の高齢化率は36.4%であり、2045年には50.1%まで上昇することが予想されている¹²⁾。これらのことから、とりわけ秋田社会においては、様々な側面からユニバーサルツーリズムへの対応はよ

り重要度を増していることは言うまでもない。

最後に、ユニバーサルツーリズムの核心である「心のバリアフリー」とは一体何なのか。政府広報オンラインでは国民に向けて、「心のバリアフリーとは、バリアを感じている人の身になって考え、行動を起こすことです¹³⁾。」と説明している。言い換えれば、社会に存在するバリアが何なのかを考え、それを解消するためのアクションを個々人のできる範囲から起こすべきであるということである。

「相手に見返りを求める事なく、他者のことを思いやり、相互の関係性を築き上げる」¹⁴⁾。これは、国際観光学科の学生が学んでいる「ホスピタリティ」の一般的な解釈であり、「心のバリアフリー」とも重なる部分が多い。国際観光学科のさまざまな実践教育において、心を豊かにする経験や教養を多く積みあげることにより、相手を思いやる気持ちをもつことが、「心のバリアフリー」実現に資することは言うまでもない。目前にある経済的な利益ばかりを追求するのではなく、心の豊かな人材を一人でも多く輩出できる観光教育に日々精進したい。

■註

- 1) 観光庁（2019）、WEBページ。
- 2) 内閣府（2017）、5ページ。
- 3) 内閣府前掲資料、20ページ。
- 4) 同上資料、25-26ページ。
- 5) 障害の社会モデルとは、「障害は個人にあるのではなく、社会にある」という考え方である。2016年に施行された「障害者差別解消法」はこの考え方に基づいている。
- 6) 4つのバリアとは、①障害者が社会生活を送る上で公共交通機関、建築物等における「物理的なバリア」、②資格制限等による「制度的なバリア」、③点字や手話サービスの欠如による「文化・情報面のバリア」、④障害者を庇護されるべき存在として捉える等、「意識上のバリア」これいわゆる「心のバリア」のことであり、初出は1995年発刊の「障害者白書」である。

- 7) 岐阜県高山市は「福祉観光都市」としてバリアフリーのまちづくりの先進事例として紹介されるばかりでなく、インバウンド観光客の誘致にも成功している事例として紹介されている。
- 8) 濱嶋ほか編（1997）、260ページ。
- 9) 社会調査における「観察法」とは、何らかの対象について、五感を用いて直接的に記録・分析する調査や、それらに関する誰かの記録を収集・分析する調査を指す。
- 10) 秋田市バリアフリー基本構想において、秋田駅周辺地区は重点整備地区からは除外されている。
- 11) 内閣府前掲資料、5ページ。なお、障害のある人（及びその家族）への差別（不当な差別的取り扱い及び合理的配慮の不提供）を行わないよう徹底することは今回の内容には含まれない。
- 12) 内閣府（2019）、11ページ。
- 13) 内閣府（2018）、WEBページ。
- 14) 乾弘幸（2018）、133ページ。

■参考文献・資料（著者姓アルファベット順）

- 井上寛「東京オリンピック・パラリンピックに向けたユニバーサルツーリズムの実現—観光福祉論における心のバリアフリー教育」『ノースアジア大学国際観光研究』第12号、2019年
- 井上寛「観光と心のバリアフリー」『ノースアジア大学国際観光研究』第11号、2018年
- 井上寛「障害者差別解消法とユニバーサルツーリズムの実現」『ノースアジア大学国際観光研究』第10号、2017年
- 濱嶋朗、竹内郁郎、石川晃弘他編『社会学小辞典』有斐閣、1997年
- 乾弘幸「観光産業とホスピタリティ」、竹内正人、竹内利江、山田浩之編著『入門観光学』ミネルヴァ書房、2018年
- 川村匡由・立岡浩編著『観光福祉論』ミネルヴァ書房、2013年
- 島川崇編著『観光福祉論』成山堂書店、2019年

秋田市都市整備部都市計画課「秋田市バリアフリー基本構想」2011年6月
(PDF形式59ページ) <https://www.city.akita.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/007/822/bf-kousouz-zentai.pdf>
2020年1月10日 閲覧

観光庁「観光立国推進基本計画」2017年3月28日 (PDF形式71ページ)
<<http://www.mlit.go.jp/common/001177992.pdf>>
2020年1月10日 閲覧

観光庁「ユニバーサルツーリズムについて」2019年4月16日
<<http://www.mlit.go.jp/kankochosisaku/sangyou/manuaru.htm>>
2020年1月10日 閲覧

厚生省「障害者白書」1994年、1995年

国土交通省「障害ってどこにあるの？こころと社会のバリアフリーハンドブック」2018年3月 (PDF形式22ページ)<<http://www.mlit.go.jp/common/001250069.pdf>> 2020年1月10日 閲覧

国土地理院「地理院地図」(電子国土WEB)
<<https://maps.gsi.go.jp/>> 2020年1月10日 閲覧

内閣府「高齢社会白書」2019年

内閣府「ユニバーサルデザイン2020行動計画」2017年2月20日 (PDF形式36ページ)<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu_ud2020kkkaigi/pdf/2020_keikaku.pdf> 2020年1月10日 閲覧

内閣府「ユニバーサルデザイン2020 中間とりまとめ」2016年8月2日 (PDF形式26ページ)<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/ud2020kaigi/pdf/h280802_matome.pdf>
2020年1月10日 閲覧

内閣府「知っていますか？街の中のバリアフリーと『心のバリアフリー』」
2018年12月10日
<<https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201812/1.html>>
2020年1月10日 閲覧

国際観光学科OB・OGとの懇談会、観光系企業による講演会・ワークショップの開催
～国際観光学科生の秋田県内企業への就職促進のための諸施策～

〔活動報告〕

国際観光学科OB・OGとの懇談会、 観光系企業による講演会・ワークショップの開催 ～国際観光学科生の秋田県内企業への就職促進のための諸施策～

横 田 恵三郎

はじめに

標題の懇談会、講演会・ワークショップの開催は県の支援を頂きながら今回で4回目の開催となり、就職活動を間近に控える3年生にとって入学以来毎年参加してきたことになります。これらのプログラムは本学科のキャリア教育の一環として開催してきており、自身のキャリアプランを描くという点で授業科目の「キャリサポート」や「観光インターンシップ」を補完または切り口の異なる手法によって学生のキャリア形成をサポートするものと位置付けております。学生は仕事を中心とした将来の人生をイメージしながら、自己を見つめつつ多くの場合は軌道修正しながら、キャリアプランを描いていくことになります。その思考過程においては前進や後退また糾余曲折はつきものでしょうし、そういう状態は十分あり得るだろうとの前提でまずはキャリプランを描いてみるために必要な知識や情報、また経験を複合的に提供し1年生から就労意識を高め将来の方向性を考える機会としております。

OB・OGとの懇談会は令和元年12月7日(土)、県内に本社か事業所を有する企業に勤務する国際観光学科卒業生の協力を得て開催し、また令和2年1月24日(金)には観光系企業2社のご協力を得て講演会とワークショップを成功裡に開催いたしましたのでそれらについて下記のとおりご報告いたします。

記

「国際観光学科OB・OGとの懇談会」について

1. 具体的な狙い

本学科1～3年生の在学生が比較的年齢の若い卒業生との対話を通じて卒業生の現在の職務、業界の動向、組織の特長や風土、職務に対する抱いていたイ

イメージと現実との関係、学生生活の過ごし方、就職活動での経験など様々な情報やアドバイスを入手し、自身の希望、能力、適性等と擦り合わせ整理することによってキャリアプランを描き易くすることを狙ったものであります。とりわけ3年生にとっては就職活動を間近に控える中、不安や焦りがどんどん募っているわけですから、過去就職活動を乗り切った卒業生の経験談や具体的な助言は大きな励みになると想いを定め実施いたしました。

2年生、1年生については就職活動開始まで暫し時間がありますが、早い時期から職業意識を育むと同時に変更または修正を加えながら徐々に将来のプランを、観光インターンシップでの実習と併せて自発的に固めていけるようキャリアサポートに主軸を置いた開催と言えます。同時に社会人となった卒業生の話し方、立居・振る舞い等が学生のそれらとはあまりにも異なることから、気付きの機会に位置づけたと共に自身も卒業生のレベルに到達しなければとの目標意識を醸成する機会として期待したわけです。

2. 開催概要

①日 時 令和元年12月7日(土) 13:00～16:30

②場 所 ノースアジア大学231教場ならびに40周年記念館講堂

③参加者 国際観光学科OB・OG 9名

- ・平成25年3月卒業：1名
- ・平成28年3月卒業：1名
- ・平成29年3月卒業：1名
- ・平成30年3月卒業：4名
- ・平成31年3月卒業：2名

国際観光学科在学生35名

(3年生：11名 2年生：12名 1年生：12名)

国際観光学科教員 3名

④実施要領

懇談会は二部構成とし、第一部は前半約1時間30分を大教場にてOB・OGからの自己・自社紹介、仕事の内容、後輩へのアドバイス等のプレゼンテーションと質疑応答にあてる「全体懇談会」とした。さらに休憩を挟み後半約1時間30分を第二部とし、講堂に場所を変え卒業生毎のアイランドを設け、3回（1回あたり25分間）の入れ替わりによる在学生とOB・OGとの双方

国際観光学科OB・OGとの懇談会、観光系企業による講演会・ワークショップの開催
～国際観光学科生の秋田県内企業への就職促進のための諸施策～

向の「個別懇談会」とした。

3. 国際観光学科長開会挨拶

OB・OGの皆さんにおかれでは師走の又天候の悪い中お越し頂き心より御礼申し上げます。このOB・OG懇談会にご理解とご支援を頂き本当にありがとうございます。2008年4月に観光学科が出来て今年で12年目になります。ご存知のとおり2019年4月に国際観光学科に名称が変更しております。多くの卒業生が観光系企業あるいは一流企業に就職しています。昨年はJALの客室乗務員に、今年も航空、鉄道、ホテル、旅行会社など様々などろに就職が決まっているわけですが、観光が地域振興に非常に大きな役割を担っています。またITの波も訪れ日々目まぐるしく進化し、VR、AR、MR、ロボット、AI、自動運転など観光企業と一緒にになって進歩してきています。国際化、ITが進展する中で本学では海外留学、海外語学研修、また海外、国内のインターンシップなどのアクティブラーニングを充実させ、かつ本日のOB・OG懇談会では他の学科とはだいぶ進め方が異なり1年生、2年生の段階から就職の意識を高めて自分の将来をしっかりと考えられる体制になっていると思います。3年生また2年生、1年生に対してOB・OGの皆さんから適切な助言を頂いてキャリアデザインを描くのに活かして頂きたいと思います。在学生の皆さんにはこの機会を有効に活用して、OB・OGの皆さんのお話をしっかりと聞き自分の将来に向けてしっかりと取り組んでもらいたいと思います。OB・OGの皆さんにおかれでは今まで以上のご理解とご支援をお願いして挨拶とさせて頂きます。

4. 第一部「全体懇談会」

参加OB・OGの皆さん（9名）一人々から自己紹介に続き、会社の概要、現在の職務、また当時の学生生活のことや就職活動のことなど8分間程度のプレゼンを行い、それに対して在学生との質疑応答の時間を設けた。就職活動を間近に控える3年生は真剣にメモをとる学生が多くいた。



今回参加に協力頂いたOB・OGは以下9名である。



①運輸関連 G. Mさん
H25. 3月卒業



②旅行関連 S. Sさん
H28. 3月卒業



③金融関連 N. Kさん
H29. 3月卒業



④サービス関連 K. Kさん
H30. 3月卒業



⑤ホテル関連 S. Kさん
H30. 3月卒業



⑥農協関連 S. Sさん
H30. 3月卒業



⑦サービス関連 T. Tさん
H30. 3月卒業



⑧ホテル関連 A. Kさん
H31. 3月卒業



⑨運輸関連 A. Sさん
H31. 3月卒業



全体懇談会の全景



質疑応答

国際観光学科O B・O Gとの懇談会、観光系企業による講演会・ワークショップの開催
～国際観光学科生の秋田県内企業への就職促進のための諸施策～

5. 第二部「個別懇談会」

「全体懇談会」の後、休憩を経て場所を講堂に移しO B・O G毎にアイランドを設け個別懇談会を実施した（懇談時間1回25分間を3回実施）。在学生は全体懇談会でのプレゼンの内容またこれまで得ていた情報から興味をもった企業・業界を3社選んでいる様子であった。



個別懇談会の全景



旅行関連のアイランド



金融関連のアイランド



ホテル関連のアイランド



熱心にメモをとる1年生



先輩との会話に表情も緩む



懇談会を終えてOB・OGの皆さんによる記念撮影

6. 在学生・卒業生のコメント（抜粋）

在学生が終了後に作成した参加レポートならびに卒業生に対して行ったアンケートの結果を一部紹介したい。

（3年生）

- ・先輩たちは私たちと年齢が近く、実際の現場の話を人事の方からでは聞くのが難しい様々なお話を聞くことができ良かった。素晴らしい私たちの先輩を見習い就職活動に頑張って向かっていこうと思う。
- ・今日の懇談会はただお仕事の内容を聞くだけと予想していたが、仕事のことば勿論、就職する際の注意点、着目点また今後の人生プランの考え方についても沢山聞くことが出来、とても有意義な時間を過ごせてよかったです。
- ・自身の課題である就活の面接について練習方法や対応策についても学ぶことが出来た。
- ・先輩のお話で特に心に残ったのは、就職活動とはどの程度入社したいかを考えるのではなく、入社してから何をやりたいかを考えることという言葉であった。

（2年生）

- ・私はまだどの職に就くか、将来何をやりたいのか決まっていないので先輩方から貴重なお話を聞くことが出来とても参考になった。
- ・昨年1年生での懇談会では何も分からず受け身になっていたが、今年は自分がききたいこと、知りたいことを質問することが出来た。

国際観光学科O B・O Gとの懇談会、観光系企業による講演会・ワークショップの開催
～国際観光学科生の秋田県内企業への就職促進のための諸施策～

- ・先輩のお話は細かい点でいろいろ違いがあったが、企業人、社会人に求められるもの、身に付けるべき点は共通していた。挨拶と笑顔、そしてメモを取ることであった。
- ・前回また今回の懇談会出席を通して1年前の私と今の私を比較する機会となり1年間で自身のどこが変化したか気付くことが出来た。そして今後やるべき事についても考える機会となった。
- ・第二部では先輩方と直接話すことが出来不安に思っていることを一对一で話せたのでよかったです。

(1年生)

- ・今回の懇談会では先輩方が学生時代はどう過ごしたのか、どんなことを考えていたのかも知ることが出来、今回参加して本当に良かったと思う。こんな大人になりたいと思う方々に出会うことができた。今回学んだこと、感じたことを忘れずにこれから大学生活を過ごしていきたい。
- ・先輩たちのプレゼンは一つ一つの言葉に自信があり聞く人に興味を持たせるのが上手いと思った。私も先輩方のような堂々とした話し方が出来るようになりたい。今後このような懇談会の機会があればまた参加したい。
- ・1年生の内から就職した先輩方の話を聞くことが出来、貴重な経験に感謝すると共に来年もまた参加したい。
- ・将来ツアーコンダクターになりたいとずっと思ってきたが、本当に自分に合っているのか、適性があるのか考える機会となった。

(O B・O Gのアンケート結果)

- ・3年生が海外に興味を持ち積極的に話を聞いている点や2年生、1年生でも自分の未来について考えているのが良かった（サービス関連）。
- ・男女含めて県内就職希望者が多かった。私の会社は全国転勤があり得るのでその点を伝えることが出来良かった（旅行関連）。
- ・積極的に質問をし受け答えもしっかりとしていた。またメモを取りながら聴く姿勢は社会人顔負けであった（金融関連）。
- ・就活でエントリーの時期やいつ何をすればいいのか具体的なスケジュールを質問してきた学生が多かった（金融関連）。
- ・3年生はこれから就活だという前のめりの雰囲気が伝わり、2年生、1年生

はまだ目がそこに向いていないので当時自分がやっていたことをお話したところ真剣に聞いてくれた（運輸関連）。

- ・第一部のプレゼン後の質疑応答に学生の積極さが伝わらなかった。第二部では私が伝えた内容に傾き、メモをとるなど好感が持てた（ホテル関連）。
- ・殆どの学生が勤務形態を気にしている様子が窺えた（農協関連）。
- ・就職活動は人生的一大イベントではあるが、就職を目的にせず就職後を見据えた活動にしてほしい（運輸関連）。
- ・3年生は就職活動、勉強に真剣に取り組むのは勿論、学生生活を精一杯楽しんで欲しいと思います。また就活は早めの行動がとても大切です（旅行関連）。

「観光系企業による講演会・ワークショップ」について

1. 具体的な狙い

昨今、日本政府は地域の多様な関係者を巻き込んだ観光地域づくりに尽力し交流人口の増加によって地方の活性化に取り組んできている。その中、多くの学生が将来は秋田を元気にする職に就きたい、観光を通して秋田の地域振興に携わりたいとの願望を持っている。

それらを踏まえて秋田の将来の観光の担い手を養成する入口として地域のまちづくりに取り組む観光系企業二社による講演会（前半）とワークショップ（後半）を開催した。学生が将来秋田の観光の担い手に就く動機付けの機会として開催した。

2. 開催概要

①日時・場所 令和2年1月24日(金)

13:00～14:30（講演） 40周年記念館271教場

15:00～16:30（ワークショップ） 同記念館講堂

②講師 （前半）あきた美郷づくり㈱観光企画部長 山下達史氏

（後半）㈱JTB秋田支店交流創造事業チーム 清野 薫氏

③参加 国際観光学科生 52名

（4年生：9名 3年生：11名 2年生：19名 1年生：13名）

観光学科教員 3名

国際観光学科O B・O Gとの懇談会、観光系企業による講演会・ワークショップの開催
～国際観光学科生の秋田県内企業への就職促進のための諸施策～

3. 山下達史氏による講演 「航空会社の地域活性化の取り組み」

同氏は本邦航空会社より第3セクターであるあきた美郷づくり㈱に出向しており、航空会社として美郷町をはじめ地域振興の数々の取り組み事例について紹介された。基本的な考え方は、「地域の魅力を見つけ磨く」→「観光資源やブランドを生み出す」→「航空会社のネットワークを活用し広める」→「売る」→「呼び込む」→「地域の魅力を見つけ磨く」のサイクルを廻すことによって交流人口を拡大し、物流を活性化することによって地域の持続的な発展に貢献し、同時に航空会社の本業にも貢献するという説明がなされた。参加学生は航空会社がどう地域の活性化と関係し貢献するのか興味深く内容を聴講していた。



山下達史氏による講演



熱心に聴講する学生

4. 清野薫氏によるワークショップ「楽しく学ぶ秋田の観光P R」

同氏は自治体をはじめ関係機関・企業と連携して観光資源を発掘し新たな価値を附加した上で、交流人口の増大に結びつくPR戦略等を企画、調整する業務に当たっている。今回、秋田の魅力（観光資源）を、誰をターゲットにして、どうPRするかを具体的に考え、制限時間内にアウトプットを出すグループワークを行った。

5W2Hを明確にし、ペルソナを定めたマーケティング手法の考え方など旅行会社のアプローチを学生は楽しくディスカッショしながら進めた。1チーム6～7名程度とし、進行役、タイムキーパー、書記など役割分担を決め、米国の友人、台湾の友人、東京の友人各々に対して秋田の見せたいところは何で、ペルソナを細かく設定し見せたい理由・根拠を明確にするルールで取り組んだ。学生は初めて経験するマーケティング手法を楽しく学び、同時にグループの中で話し合うコミュニケーション力の大切さを実感していた。



清野薫氏によるワークショップ講演



ワークショップ全景



秋田の魅力は何だ？！



グループ毎に成果の発表

むすびにかえて

令和元年度のO B・O Gとの懇談会また観光企業による講演会・ワークショップは卒業生の皆さん、また観光企業の方々から絶大なご理解とご協力を賜り何れも成功裡に開催することが出来ました。この場を借りて深甚なる感謝の意を表したいと思います。授業で実施するキャリア教育とは趣を異にしますが、観光インターンシップを含め学外の人々と交わりながら多面的に実施することによって学生が就労意識を育み徐々に自己のキャリアデザインをしっかりと描いていくのに大きな効果があると捉えております。ある2年生の今回のレポートに1年前参加時の自身と今回の自身を比較していい意味で変化していることに気付いたとの表記がありました。学生が成長している証であり、成長と共にこれらプログラムに参加する意義が自身の中で明確になってきたものと嬉しく捉えました。そして1年後にまた参加ののち、自信をもって就職活動に臨む姿を大いに期待したいと思います。再度、関係各方面各位に感謝の意を表します。

〔活動報告〕

第7回 高校生 私達のまちの観光魅力アップコンテスト

井 上 寛

はじめに

本学国際観光学科では、平成25年度より「私達のまちの観光魅力アップコンテスト」を毎秋開催している。本稿は、このコンテストの概要について記録したものである。

1. コンテスト開催の目的とその概要

(1) 目的

本コンテスト開催の目的は、高校生が観光に対し興味・関心を持つこと、そして、観光を学ぶことの重要性・必要性を理解させることにある。また、コンテストを実施することにより、高校生が秋田県をはじめとする地域社会の現状を理解し、地域社会に対する誇りと愛着を持ち、地域社会を元氣にする契機となることを目指して実施する。さらに、高校生が、住んでいる地域を観光で魅力アップするアイディアやツアープランを提案することを通して、ふるさとの魅力を再発見とともに、高校生の力でその魅力を全国に広める機会とする。

(2) 概要

高校生が作成し提出された応募書類を本学国際観光学科において審査する。予選を通過した団体については、本学で本選（プレゼンテーション）を実施し、優秀チームの表彰を行うこととする。なお、最優秀賞（1本）には賞状ならびに5万円の旅行券、優秀賞（1本）には賞状ならびに3万円の旅行券、奨励賞

(3本)には、賞状ならびに1万円の旅行券が贈られる。なお、本コンテストへの応募単位は、高校生個人またはグループで、各高校の応募数に制限はない。

本年度は、応募書類の提出期限を令和元年10月25日までとした。その後、書類審査を実施し、令和元年11月1日までに、本選出場チームの発表と通知を行った。なお、コンテスト本選は令和元年11月22日に開催することが決定した。

2. 予選の実施

応募書類の提出期限までに、「エントリーシート」(様式1)のほか、「応募書類」(様式2)の提出を求めた(図表1)。その後、国際観光学科教員により、これらの書類審査による予選を実施した。審査の結果、13チームが予選を通過したが、都合により棄権した2チームがあったため、本選出場は11チームとなった(図表2)。

図表1 応募書類の内容

項目	内 容
プランの具体的な内容	プランの内容とその意義について、対象地域の現状を踏まえながら、具体的かつ詳細に説明すること。また、プランを実施するにあたっての具体的なスケジュールを可能な範囲で記載すること。
プランの特徴	プランの特徴(独自性、創造性、地域的特色)を具体的かつ詳細に記載すること。
プランの効果	プランを実施することによって、対象地域にとってどのような効果が見込まれるか、箇条書きで記載すること。
その他の資料	写真、絵、図表を活用したプランのイメージ図あるいは補足資料がある場合は、この用紙に記入又は添付すること。

3. 審査員

本選の審査員は、学外と学内から各1名、観光の実践的分野に造詣が深い以下の2名の方にお願いした。

柏木 淳英 氏 株式会社JTB 観光開発プロデューサー

塚原 雄二 氏 本学法學部国際観光学科 教授

図表2 コンテスト本選の発表タイトル（11チーム・発表順）

	発表タイトル
1	東北活性化プラン !! –秋田の鉄道事情
2	ユニバーサルツアーア大人旅 ~車椅子でも旅行に行ける！in能代~
3	自然体験型 子どもも楽しめる能代市観光ツアー
4	WELCOME TO OUR TOWN
5	路面電車を利用した秋田県の活性化
6	外国人に来てもらおう !!
7	みずみずしいおもてなし 田沢湖に湖上ホテル
8	ゲームor自然～自然っしょ !!
9	湘南ひらつかでのんびりしませんか？～SDGs持続可能な観光まちづくりを目指して～
10	外国人観光客向けの民泊体験
11	たまには現実逃避してもいいじゃない～癒やしを求めて三千里～

図表3 コンテスト本選の審査項目

審査項目	内容
項目1 まちへの効果	発表するプランが、その地域の観光を魅力アップするために役立つプランか。
項目2 ユニーク性	既成概念にとらわれず、高校生らしい斬新かつユニークなアイディアがプランに盛り込まれているか。
項目3 実現可能性	発表するプランが、実際に旅行商品として販売できる可能性があるか。
項目4 プrezンカ	高校生らしく元気よく、発表するプランの魅力を全国にPRしているか。

4. コンテスト本選の開催

令和元年11月22日、ノースアジア大学ノースアジア大学40周年記念館271教場において、私達のまちの観光魅力アップコンテストが予定通り開催された。

審査項目は図表3の通り、まちへの効果、ユニーク性、実現可能性、プレゼン力の4項目である。これらの項目について、審査員2名の合計点によって順

位を決定する方法とした。なお、発表順序は主催者側がくじを引き事前に決定した。各チームの発表時間は8分間で、時間内は、スライド画面の使用、資料の配布、さまざまな演出等自由に行うことができることとした。

(1) 午前の部

定刻通り10時40分に開会式がスタートした。会場は、出場校の高校生のほか、本学国際観光学科の学生が発表を見学した。主催者を代表して瀧森威国際観光学科長からの挨拶があり、審査員紹介、発表上の注意と続いた。

開会式の後、ノースアジア大学国際観光学科の学生2名の司会により、午前の部がスタートした。午前の部では、明桜高等学校2年生による「東北活性化プラン!!－秋田の鉄道事情」、能代西高等学校3年生による「ユニバーサルツア大人旅～車椅子でも旅行に行ける！in能代～」、「自然体験型 子どもも楽しめる能代市観光ツアー」、「WELCOME TO OUR TOWN」の3チーム、明桜高等学校2年生「路面電車を利用した秋田県の活性化」の計5チームが発表した。

(2) 午後の部

途中に昼食・休憩時間をはさみ、13時からの午後の部では、明桜高等学校3年生による「外国人に来てもらおう！！」、明桜高等学校2年生による「みずみずしいおもてなし 田沢湖に湖上ホテル」、能代西高等学校3年生による「ゲームor自然～自然っしょ!!」、神奈川県立平塚商業高等学校3年生による「湘南ひらつかでのんびりしませんか？～S D G s持続可能な観光まちづくりを目指して～」、能代西高等学校3年生による「外国人観光客向けの民泊体験 たまには現実逃避してもいいじゃない～癒やしを求めて三千里～」の計6チームが発表した。いずれのチームも、スライド映像を使用した高校生らしい元気な発表であった。審査員や会場からの質問も活発に行われ発表は盛会に終わった。その後、審査員は一旦退席し、審査の時間となった。

(3) 閉会式

閉会式では、成績発表が行われた。木村澄法学部長から最優秀賞と優秀賞各1チーム、奨励賞3チームに表彰状と副賞が贈られた。その後、各審査員から講評をいただき、記念撮影をして閉会となった。

5. 入賞者

厳正なる審査の結果、今回のコンテストでの最優秀賞と優秀賞各1チーム、奨励賞3チームは下記の通りである。

(1) 最優秀賞

「湘南ひらつかでのんびりしませんか？～S D G s

持続可能な観光まちづくりを目指して～」

内山さくらさん・西森圭奈さん（平塚商業高校3年）

(2) 優秀賞

「みずみずしいおもてなし 田沢湖に湖上ホテル」

景山登梧さん（明桜高校1年）

(3) 奨励賞

「路面電車を利用した秋田県の活性化」

鈴木麻衣さん・工藤万結さん・杉本有紀さん・松田鈴さん（明桜高校2年）

「ゲーム○r自然～自然っしょ!!」

中村岳斗さん・金子大空さん・小林琉暉さん（能代西高校3年）

「たまには現実逃避してもいいじゃない～癒やしを求めて三千里～」

畠山祐里奈さん・武田成実さん・武田瑠華さん（能代西高校3年）

6. コンテストを終えて

コンテスト本選の閉会式において、審査員の柏木氏からいただいた講評の中で、「いよいよ旅行業界もＩＴを意識していかなければならなくなつた」というコメントがとりわけ印象的であった。外国人観光客の増加や人材不足が叫ばれる今日であるが、そのような技術を上手に使うことにより、技術的に言葉の壁を取り払ったり、人手不足を解消することは重要であるし、高校生が自由な発想でその活用方法を考案することは有益であり大きな意味を持つ。

冒頭でも述べたが、私たちがこのコンテストを開催する第一義は「高校生に観光を学ぶことに対して興味を持ってもらう」ということにある。観光立国が呼ばれる中、新学習指導要領において「観光ビジネス」科目が新設された商業科はもちろんのこと、それ以外の高等学校においても、観光そして地域を学ぶことは今後重要度を増してくるだろう。その教育の一助となるコンテストに成長させていきたい。

最後に、ツアープランニングコンテストの開催にあたり、応募する高校生にご指導、引率いただいた高等学校の先生方、ご多用の中、発表を聞き審査していただいた審査員の方々、ご協力いただいた皆様に御礼申し上げる次第である。

第7回 高校生 私達のまちの観光魅力アップコンテスト

■入賞者の写真

<最優秀賞>



平塚商業高校（神奈川）

内山さくらさん

西森圭奈さん

<優秀賞>



明桜高校

景山登梧さん

<奨励賞>



明桜高等学校
鈴木麻衣さん
工藤万結さん
杉本有紀さん
松田 鈴さん

<奨励賞>



能代西高等学校
中村岳斗さん
金子大空さん
小林琉暉さん

<奨励賞>



能代西高等学校
畠山祐里奈さん
武田成実さん
武田瑠華さん

第7回 高校生 私達のまちの観光魅力アップコンテスト

■会場の様子



＜資料＞ コンテスト開催の案内



ノースアジア大学 国際観光学科主催 第7回 高校生 私達のまちの 観光魅力アップコンテスト

エントリー書類
10月25日まで

「私達のまちの観光魅力アップ」コンテストは、高校生が観光による魅力アッププランを提案し競い合うコンテストです。みなさんの高校があるまち、住んでいるまちを観光で元気に魅力アップする、高校生だからできるアイディアを提案してください。予選通過チームは後日、本選にてプレゼンテーションをしていただきます。

最優秀賞1本 <副賞>旅行券5万円

優秀賞1本 <副賞>旅行券3万円 奨励賞3本 <副賞>旅行券1万円

応募条件

- ①全国の高等学校に在籍する高校生または高校生で構成されるチーム(1チーム3人まで)であること。
- ②指導する教員(授業担当または部活・クラブ活動の顧問等)がいること。

応募方法

エントリーシート<様式1>と応募書類<様式2>の提出

→提出期限 2019年10月25日(金)まで

※下記のURLからエントリーシートと応募書類はダウンロードできます

審査基準

- ◆実現可能なプランか
- ◆まちにとって効果のあるプランか。
- ◆高校生らしいユニークで創造的なアイディアが提案されているか。

本選の日時と会場

予選通過チームは本選にてプレゼン発表していただきます

2019年11月22日(金) 於：ノースアジア大学

主催：ノースアジア大学 国際観光学科 <http://www.nau.ac.jp>

問い合わせ先：〒010-8515 秋田市下北手桜守沢46-1 ☎018-836-1270/1225 担当：井上・横田

〔活動報告〕

角館武家屋敷通りにおける多言語アンケート調査

井 上 寛

はじめに

本学法学部国際観光学科のカリキュラムに、2018年より「地域再生論」という名称の科目が新設された。この科目は、実際に地域再生に取り組んでいる方々をお招きし学内で講義を実施するもので、さらに事例研究として学外で実施するフィールドワークも授業内容に組み込まれている。

2019年11月9日(土)には、「角館の武家屋敷と観光まちづくり」と題するフィールドワークを仙北市角館町武家屋敷通り周辺で実施した。この日に実施したフィールドワークは2種類あり、仙北市角館町「重要伝統的建造物群保存地区¹⁾」の見学と、さらに同地区を訪れている観光客を対象にしたアンケート調査である。前者は、地域再生論の授業²⁾で学んだ条例やまちなみ保存について、実地を確認することが目的であり、後者は、他の授業等で学んだ社会調査の実践、とりわけ外国語での調査票の作成と実施が目的である。ごく限られた日時で実施した限定的な調査であるため、数量データとして十分なサンプル数とは言えないが、外国語への翻訳を含めた調査票の作成から集計分析は受講学生が行った。本稿はその活動報告である。

1. アンケート調査の概要

(1) 調査日時・場所

2019年11月9日(土)午前10時より12時まで、仙北市角館町の武家屋敷通り周辺の地図の点線部分で囲まれたエリアで実施した。

(2) 調査の対象

仙北市角館町の武家屋敷通りを訪れる観光客を対象とした。

地図 調査地点



出典：地理院地図(電子国土WEB)<<http://maps.gsi.go.jp>>を筆者が加工して作成

(3) 調査の方法

4か国語（日本語・英語・中国語・韓国語）による質問紙調査を調査員による面接調査法（他記式）で実施した。

(4) 調査員とサンプル数

地域再生論受講者25名と台湾からの留学生4名、計29名で実施した。調査員は大学のベストを着用し、2名ないし3名で1チームを組成し、10時から11時の前半に5チーム、11時から12時の後半に5チームの体制で調査を行った結果、37サンプル（うち外国人7サンプル）を回収した。

なお、調査の謝礼として、本学のボールペンと仙北市提供の乳頭温泉の入浴剤を回答者に進呈した。

(5) 調査票の作成

調査票は、授業以外の時間を利用し、学生と筆者で検討を行い作成した。特に選択肢は相互排他的かつ網羅的になるように配慮した。質問項目は、(1) 国籍、来訪回数（外国人のみ）、居住地域（日本人のみ）、性別、年齢といった回答者の属性に関するもの、(2) 旅行日数、人数、旅行形態、交通手段、角館観光前後の目的地など回答者の旅行形態に関するもの、(3) 角館の訪問回数、観光情報の入手方法、訪問理由、角館で訪れる観光スポット、飲食、土産など、今回の角館観光に関する質問で構成されている。日本語の調査票が完成したのち、外国語への翻訳は地域再生論を受講している国際観光学科の学生と台湾と

韓国からの留学生、留学希望者が行った。正確さを期すため、外国語の部分に
関しては語学担当教員³⁾に監修をお願いした。

2. アンケート調査の結果

調査を実施した翌週11月14日(木)、地域再生論の授業内で表計算ソフトを使用してデータの集計を行った。有効回答数が37と少なく数量データとして極めて限定的である。本稿では、属性部分以外の集計表について、居住地域を外国人、秋田県内(仙北市内含む)、東北地方(秋田県以外)、東北地方以外の地方と国内4地域(一部カテゴリー統合)とした集計表を提示する。

(1) 回答者の属性に関する質問

質問1-1 回答者の国籍と居住地域

質問1-1では、外国人に対しては国籍、日本人については居住地域の都道府県名、県内の場合は市町村名を尋ねた(表1・表2)。外国人観光客は、台湾が8名、タイが1名であった。国内観光客は、近畿地方や関東地方からも足を延ばしており、東北地方では岩手、山形といった隣県からの観光客であった。

表1 回答者の国籍(n=8)

	回答数
台湾	7
タイ	1

表2 回答者の居住地域(n=29)

	回答数
秋田県内	6
東北地方(秋田県以外)	6
東北地方以外	17

表3 回答者の性別(n=37)

	回答数
女性	22
男性	13
未回答	2

表4 回答者の年齢(n=37)

	回答数
20歳代	3
30歳代	6
40歳代	3
50歳代	8
60歳代	8
70歳以上	6
未回答	3

質問1-2 回答者の性別

質問1-2では回答者の性別を尋ねた。女性が22名、男性が13名、未回答が2名であった（表3）。

質問1-3 回答者の年齢

質問1-3では回答者の年齢を尋ねた。今回の調査では50歳代と60歳代が各8名、30歳代と70歳以上が各6名、20歳代と40歳代、未回答が各3名であった（表4）。

質問1-4 回答者の来日回数（外国人観光客のみ）

質問1-4では回答者の来日回数を尋ねた。角館を訪れる外国人は日本へのリピーターが多いのではないかという仮説を持っていたが、サンプルが少ないながらも結果がデータに現れた。タイからの観光客は14回訪日しているとのことであった（表5）。

表5 来日回数(n=8)

	回答数
3回	1
4回	1
5回	2
10回以上	4

（2）旅行形態に関する質問

質問2-1 旅行日数

質問2-1では、今回の旅行日数について单一回答形式で尋ねたところ、居住地との距離によって結果に差が出た。外国人観光客は、全員4泊以上と回答しており、遠方からの観光客は1泊2日以上の旅行日数となっていることがわかった。一方で秋田県内からの旅行者も宿泊を伴う旅行で訪れていることがわかった（表6）。

表6 旅行日数 (n=37)

	県内	東北	東北以外	海外	合計
日帰り	4	1			5
1泊2日	1	3	3		7
2泊3日	1	2	14		17
3泊4日					
4泊以上				8	8
未回答		1			1

質問2-2 旅行の人数

質問2-2では今回の旅行の人数について单一回答形式で尋ねた（表7）。データにばらつきがあったものの、2人と答えた回答が14名と一番多く、外国人観光客は団体旅行なのでわからないという回答が4名あった。

表7 旅行の人数 (n=37)

	県内	東北	東北以外	海外	合計
1人			3		3
2人	2	3	8	1	14
3人	2	3	1	1	7
4人	1		1		2
5人	1			1	2
6人				1	1
団体旅行なので不明			3	4	7
無効回答			1		1

質問2-3 旅行の形態

質問2-3では今回の旅行の形態について单一回答形式で尋ねた。各地域の回答者とも個人が一番多かった。特に外国人の回答者に対し、質問の意図が上手に伝わらなかった可能性がある（表8）。

表8 旅行形態 (n=37)

	県内	東北	東北以外	海外	合計
個人旅行	6	6	11	4	27
修学旅行・遠足					
職場等の旅行				3	3
町内会等					
ツアーハウスへの参加			6	1	7

質問2-4 角館までの交通手段

質問2-4では角館までの交通手段について单一回答形式で尋ねた。遠方からの観光客は秋田新幹線を利用することが多く、一方県内や東北からの観光客は自家用車を利用していることがわかる（表9）。

表9 角館までの交通手段（n=37）

	県内	東北	東北以外	海外	合計
秋田新幹線	1	1	7	3	12
路線バス				2	2
貸切バス			3	2	5
自家用車	5	5	2		12
レンタカー			2	1	3
未回答			3		3

質問2-5 角館を観光する前に訪れた地点

質問2-5では角館を観光する前はどこから来たのかを尋ねた（表10）。遠方からの観光客は、別の観光地から訪れているケースが多く見られた。具体的な記述では、外国人観光客は仙台や盛岡、森の風（鶯宿温泉）と回答しており、東北以外からの観光客は、秋田市、北秋田市、横手市、男鹿半島、湯瀬温泉、阿仁、田沢湖といった秋田県内の地名、奥入瀬、平泉、盛岡といった隣県の地名が見られた。

表10 角館を観光する前に訪れた地点（n=37）

	県内	東北	東北以外	海外	合計
自宅から	6	2	3		11
観光地から		4	12	5	21
宿泊地から			1	3	4
わからない			1		1

質問2-6 角館を観光する後に訪れる予定の場所

質問2-5では角館を観光した後に訪れる予定の場所を尋ねた（表11）。土曜日の午前中ということもあり、この後他の観光地を訪れるという回答が多く見られた。自由記述では、外国人観光客は、秋田内陸線、秋田市、田沢湖などの県内、仙台、鳴子峡など県外の東北各地、東北以外からの観光客は、仙北市内の乳頭温泉、田沢湖、秋田県内の秋田市や男鹿半島、県外の中尊寺や仙台など県外の東北各地の記述が見られた。

表11 角館の後に訪れる予定の場所（N=37）

	県内	東北	東北以外	海外	合計
自宅へ	3	3	6		12
観光地へ	2	3	10	7	22
宿泊先へ	1		1	1	3

(3) 角館の観光について

質問3-1 角館を観光したことのある回数

質問3-1では、角館を観光するのは今回で何回目かを実数で尋ねた（表12）。

外国人観光客は6名が1回目と回答している中で、2回目も2名いた。リピーターも存在するようである。

表12 角館を観光したことのある回数（n=37）

	県内	東北	東北以外	海外	合計
1回目		1	12	6	19
2回目	1	1	2	2	6
3回目	1	1	2		4
4回目		2			2
10回目以上	2				2
不明	2	1	1	0	4

質問3-2 観光情報の入手方法

質問3-2では、角館の観光情報をどのように入手したのかを複数回答で尋ねた（表13）。外国人観光客は旅行会社の回答が3名と多く、台湾から運行されていたチャーター便の影響であると予想される。回答者全体で多いのは旅行雑誌（9名）、ウェブサイト（6名）であった。その他として、「レンタカーカー会社に勧められた」という記述もあった。

表13 観光情報の入手方法 (n=37)

	県内	東北	東北以外	海外	合計
旅行雑誌		3	4	2	9
テレビ	1		3		4
旅行会社			2	3	5
知人に聞いて			1		1
ウェブサイト	1		3	2	6
SNS・ブログ	1	2	1		4
駅のポスター	2				2
その他	1		1		2

質問3-3 角館を訪れた主な理由

質問3-3では角館を訪れた主な理由について单一回答で質問した（表14）。11月上旬で紅葉の見ごろであったため、「武家屋敷通りの紅葉」の回答が比較的多く見られた。また、「過去に訪れたことがあった」という回答も、重要ではなかろうか。

表14 角館を訪れた理由(n=37)

	県内	東北	東北以外	海外	合計
武家屋敷通りの紅葉	4	5	6	6	21
歴史的建造物を見学			1		1
小京都の雰囲気を味わう				1	1
ツアーに組み込まれていた			2	1	3
グルメを楽しむ			1		1
過去に訪れたことがあった	1		3		4
その他	1		2		3
不明		1	2		3

質問3-4 角館で訪れた、これから訪れる予定の場所

質問3-4では今回角館で訪れた、あるいはこれから訪れる予定の場所について複数回答で問した（表15）。調査地点によって回答に差異がある可能性があること、「その他」では、武家屋敷という回答があり、個々の屋敷の名前を認識しておらず回答できなかつた可能性がある。

表15 角館で訪れた、訪れる予定の場所（複数回答）

	県内	東北	東北以外	海外	合計
石黒家			8	3	11
青柳家		1	6	2	9
松本家			1	1	2
岩橋家		4	4		8
河原田家		1	1		2
小田野家		1	1		2
樺細工伝承館	1		2	1	4
平福記念美術館				2	2
新潮社記念文学館					0
安藤醸造	1		1	1	3
西宮家			1		1
角館駅前蔵			1		1
その他	1	3	4	2	10

質問3-5 角館での飲食について

質問3-5では角館での飲食やこれから飲食する予定について自由記述で尋ねた。これらを整理したものが表16である。きりたんぽ鍋、比内地鶏の親子丢、稻庭うどんなど、武家屋敷通りで飲食できるものが回答された一方で、「飲食しない」、「わからない」の回答も多く見られた。

表16 角館での飲食

	県内	東北	東北以外	海外	合計
きりたんぽ鍋			1	1	2
比内地鶏の親子丢			3	1	4
稲庭うどん			6		6
郷土料理		1			1
スイーツ(ソフトクリーム・団子)		1	1		2
コンビニ			1		1
これから（未定）	1		1		2
飲食しない	2		2	2	6
わからない	3	3	2	2	8

質問3-6 角館での土産購入

質問3-6では角館での土産購入やこれから土産を購入する予定について自由記述で尋ねた。これらを整理したものが表17である。秋田県外の観光客には、もろこし、生もろこしが多く見られたが、海外からの観光客は「購入しない」「わからない」という回答が見られた。

表17 角館での土産の購入

	県内	東北	東北以外	海外	合計
いぶりがっこ			2		2
酒		1	1	2	4
稲庭うどん			1		1
もろこし・生もろこし		3	5		8
金萬			1		1
醤油・みそ		1	1		2
さなづら	1				1
せんべい				1	1
りんご加工品			2		2
購入しない	2	1	1	2	6
わからない	3	1	4	2	10

3. 総括

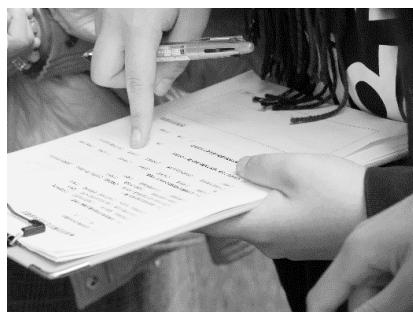
今回の調査は、学生が調査票を作成し、日本語以外の3か国語への翻訳や外国語でのインタビューを実施する部分に重点を置いた。調査票を作成したもの、韓国語と英語の調査票の出番はほとんどなかった。時期をずらして再度同様の調査を実施し、回答のサンプル数を増やすと有為な数量データとして利用できる可能性がある。また、調査員全体に対し、質問項目についての説明が不十分であったことが反省点である。しかし、調査票の作成や外国語への翻訳、実査をする体験ができたことは学生にとって大きな収穫であったに違いない。

本調査を実施するにあたり、仙北市観光商工部観光課と仙北市教育委員会文化財課にはさまざまな面からご協力いただいた。この場を借りて御礼申し上げる。

■註

- 1) 1975年の文化財保護法の改正により制定された制度で、2019年12月現在全国に120地区ある。この地区は「角館町伝統的建造物群保存地区」として、1976年9月に選定された。なお、2005年に「仙北市角館伝統的建造物群保存地区」に名称が変更された。
- 2) 2019年10月17日(木)、仙北市教育委員会文化財課富木弘一課長に「角館の武家屋敷と観光まちづくり」と題する講義をしていただいた。
- 3) 韓国は金森福子講師、中国語は吉田春華講師、英語は三浦薰准教授に翻訳の監修を依頼した。

■写真



角館武家屋敷通りにおける多言語アンケート調査

■資料1 調査票（日本語）

角館の観光に関するアンケート調査(国内観光客向け)

私たちは秋田県秋田市にあるノースアジア大学国際観光学科の学生です。このたび仙北市観光課にご協力いただき、学外実習として角館の観光に関するアンケートを実施しております。本調査において回収したデータは法令を遵守し、統計的に処理いたします。旅行中お手数をおかけいたしますが、ご協力いただきますようお願いいたします。

ノースアジア大学 法学部 国際観光学科

11月9日(土) 時刻: ___時___分 調査者氏名: _____

◆あなた自身についてお尋ねします。

1-1 お住まい []都・道・府・県 県内 []市・町・村 仙北市内

1-2 性別 男性 女性

1-3 年齢 19歳以下 20歳代 30歳代 40歳代 50歳代 60歳代 70歳以上

◆今回の旅行形態についてお尋ねします。

2-1 今回の旅行日数を教えてください。

1日帰り 1泊2日 2泊3日 3泊4日 4泊以上 [泊]

2-2 今回の旅行の人数を教えてください。

_____人 団体旅行なのでわからない

2-3 今回の旅行形態を教えてください。

個人旅行 修学旅行・遠足 職場等の旅行 町内会等地域の旅行 ツアーへの参加

2-4 角館にはどの交通手段でいらっしゃいましたか？

秋田新幹線 田沢湖線普通列車 内陸線 路線バス 夜行高速バス タクシー
 秋田エアポートライナー(乗合タクシー) 貸切バス 自家用車 レンタカー 自転車・徒歩

2-5 角館を観光する前はどうちらからいらっしゃいましたか？

自宅から 観光地から(場所: _____) 宿泊先から(場所: _____)
 わからない

2-6 角館を観光したあとはどちらに行われる予定ですか？

自宅へ 観光地へ(場所: _____) 宿泊先へ(場所: _____)
 わからない

◆今回の角館の観光についてお尋ねします。

3-1 角館を観光するのは今回で何回目ですか？

_____回目

3-2 角館の観光情報をどのように入手しましたか？(複数選択可)

- 旅行雑誌・ガイドブックを見て テレビの旅行番組を視聴して 旅行会社を通じて
仙北市・観光協会に問い合わせて 以前角館に来たことのある知人に聞いて ウェブサイト
SNSやブログを見て 駅のポスター・パンフレットを見て その他[]

3-3 角館を訪れた主な理由を教えてください。(ひとつ選択)

- 武家屋敷通りの紅葉 趣味の写真撮影 情報を SNS にアップする 歴史的建造物を見学
小京都の雰囲気を味わう ツアーに組み込まれていた 交通機関の乗換の間合い
グルメを楽しむ 過去に訪れたことがあった その他[]

3-4 今回角館で訪れた、あるいはこれから訪れる予定の場所を教えてください。(複数選択可)

- 石黒家 青柳家 松本家 岩橋家 河原田家 小田野家 柳細工伝承館
平福記念美術館 新潮社記念文学館 安藤醸造 西宮家 角館駅前蔵
その他[]

3-5 角館で何を飲食されましたか。あるいはこれから飲食される予定ですか?(自由記述)

- 品名 [] 飲食しない わからない

3-6 お土産は何を購入しましたか。あるいはこれから購入する予定ですか?(自由記述)

- 品名 [] 購入しない わからない

ご協力ありがとうございました。

その他 自由記述

■資料2 調査票（英語）

Survey on "Tourism in Kakunodate"

We are from Department of International Tourism of North Asia University, Akita. With the cooperation of the tourism division of Senboku city, we are now taking a survey on "Tourism in Kakunodate as a practical training. The data collected in this survey will be processed statistically in compliance with the law. Sorry to inconvenience you but we appreciate your help.

Department of International Tourism, North Asia University

November 9th time:(a.m./p.m.) ____ Name: _____

◆Personal information

1-1 Nationality []

1-2 Sex Male Female

1-3 Age 10's 20's 30's 40's 50's 60's 70's

1-4 How many times have you come to Japan?

For the first time Twice Three times Four times Five times Living in Japan

◆Travel form

2-1 How long are you traveling?

Day trip Two days and One night Three days and Two nights Four days and Three nights 4nights or more

2-2 How many people are there in your group?

2-3 What is the type of this trip ?

Personal trip School trip Business trip Trip with neighbors' group
 Participating in a package tour

2-4 How did you come to Kakunodate?

Akita bullet train Tazawako line local train Nairikusen Local bus Express bus
 taxi
 Shared taxi Chartered bus Privately owned car Rental car Bike ,Walk

2-5 Where did you stay before visiting Kakunodate?

Home Other place(_____) Hotel(_____)
 Don't know

2-6 Where are you going after Kakunodate?

Home Other place(_____) Hotel(_____)
 Don't know

◆Sightseeing in Kakunodate

3-1 How many times have you visited Kakunodate?

3-2 How did you know about Kakunodate?

- Travel magazine , Guide book TV Travel agency Tourism association
Acquaintance Web site SNS Poster , Brochure Other[]

3-3 What brings you to Kakunodate?

- Red leaves Taking pictures Upload images to SNS Landmark
The atmosphere of little Kyoto Tour plan Transfer Enjoying gourmet
I have been to Kakunodate before Other[]

3-4 Where are you going from now?

- Ishiguro house Aoyagi house Matsumoto house Iwahashi house Kawarada
house Odano house Kabazaiku traditional hall Hirafuku memorial museum
Shinchosha memorial literature museum Ando Japanese sake brewery
Nishinomiya house Kakunodate station maegura Other[]

3-5 Did you eat or drink in Kakunodate?

- [Product name:] No Don't know

3-6 What did you buy for souvenirs?

- [Product name:] No Don't know

Thanks you for answering the questionnaire.

Free:

■資料3 調査票（韓国語）

가쿠노다테 관광 현황에 관한 설문조사(인바운드 관광객 대상)

저희는 아키타현 아키타시에 있는 노스아시아대학 국제관광학과 학생입니다. 센보쿠시 관광과의 협력을 받아 학제 실습으로 가쿠노다테 관광 현황에 관한 설문조사를 실시하고 있습니다. 본 조사에서 회수한 데이터는 법령을 준수해 처리하겠습니다. 여행 중 번거로우시겠지만 협력해주시면 감사하겠습니다.

노스아시아대학 법학부 국제관광학과

11월 9일(토) 시간: ___시___분 질문자 설명: _____

◆귀하의 정보에 대해 물겠습니다.

1-1 국 적 [거주국 명] _____

1-2 성 별 남성 여성

1-3 연 령 19세 이하 20대 30대 40대 50대 60대 70대 이상

1-4 방일 횟수 처음 2 번째 3 번째 4 번째 5 번째 일본거주

◆이번 여행 형태에 대해 물겠습니다.

2-1 이번 여행 일수는 몇 일 입니까?

당일치기 1박 2일 2박 3일 3박 4일 4일 이상 [밤]

2-2 이번 여행에서 본인을 포함한 일행은 총 몇 명입니까?

몇 단체여행이라서 잘 모른다.

2-3 이번 여행의 성격은 무엇입니까?

개인여행 수학여행·소풍 직장 등에서의 여행 동호회에서의 여행 투어참가

2-4 가쿠노다테까지 오실 때 이용한 교통수단은 무엇입니까?

아키타 신칸센 다자와코선 보통 열차 내륙선 도선버스 야간고속버스 택시
아키타메어포트라이너(공항과 관광지를 연결하는 합승 택시) 전세버스 자기용 렌터카
자전거, 도보

2-5 가쿠노다테를 방문하기 전에는 어디에 계셨습니까?

자택 관광지(장소: _____)
숙소(장소: _____) 잘 모르겠다

2-6 가쿠노다테를 관광한 후에는 어디를 가실 예정입니까??

자택 관광지(장소: _____)
숙소(장소: _____) 잘 모르겠다

◆가쿠노다테 관광에 관해 물겠습니다.

3-1 가쿠노다테 방문이 몇 번째 입니까?

회

3-2 가쿠노다테 관련 정보는 어떻게 얻었습니까?(복수응답 가능)

- 여행잡지·가이드북 TV 여행프로그램 여행사
센쿠보시, 관광협회에 문의 이전에 가쿠노다테에 방문한 적이 있는 지인을 통해 웹사이트
SNS, 블로그 역에 있는 프스터 및 햄플렛 기타[]

3-3 가쿠노다테를 방문한 주된 이유는 무엇입니까?

- 누카야시키거리의 단풍 사진촬영 정보를 SNS에 공유 역사적 건축물 견학
작은 교토의 분위기 만끽 투어에 포함되어 있어서 교통수단 환승시간 활용
맛집탐방 과거에 방문했을 때 기억이 좋아서 기타[]

3-4 가쿠노다테에서 방문했거나 앞으로 방문할 곳은 어디입니까?(복수응답 가능)

- 이시구로저택(石黒家) 아오야기저택(青柳家) 마즈모토가(松本家) 이와하시가(岩橋家)
가와라다다가(河原田家) 오타노가(小田野家) 빛나무세공전승관(檜細工伝承館) 히라후쿠기념
미술관(平福記念美術館)
신초사 기념문학관(新潮社記念文学館) 안도 양조장(安藤醸造) 니시노미야가(西客家)
가쿠노다테 역 앞 장고(角館駅前藏)
기타[]

3-5 가쿠노다테에서 드신 음식 혹은 지금부터 드실 음식은 무엇입니까?

- 죽명 구매하지 않음 잘 모르겠다

3-6 기념품은 무엇을 구매하셨습니까? 혹은 무엇을 구매할 예정입니까?

- 죽명 구매하지 않음 잘 모르겠다

협력해 주셔서 감사합니다.

그 외 소감

R1角館 下

■資料4 調査票（中国語）

關於角館觀光行程問卷調查(對象為來日本的觀光客)

我們是來自秋田縣秋田市北亞大學國際觀光科的學生。這次得到仙北市觀光課的協助，作為課外實習實施此次的問卷調查。

關於本次收回的問卷將會遵守法律規範，統計並處理。感謝您在旅途中抽空填寫本問卷。

北亞大學 法學部 國際觀光學科

11月9日(六) 時間：時 分 調查者姓名：

◆請填寫您的基本資料

- I-1 國籍 國名
I-2 性別 男性 女性
I-3 年齡 19 歲以下 20~29 歲 30~39 歲 40~49 歲 50~59 歲
60~69 歲 70 歲以上
I-4 來日本的次數 第一次 第二次 第三次 第四次 第五次 住在日本

◆請問您此次的旅行方式

- 2-1 此次旅行天數
當日來回 兩天一夜 三天兩夜 四天三夜 四天以上(夜)

- 2-2 此次旅行人數
人 跟團、不確定人數

- 2-3 此次旅行的方式
個人旅行 畢業旅行、遠足 員工旅遊 社區旅遊 跟團旅行

- 2-4 到達角館的交通方式
秋田新幹線 由潭湖線普通列車 內陸線 路線巴士 夜行高速巴士 計程車
秋田機場合乘計程車 出租巴士 自用車 租車 腳踏車、走路

- 2-5 參訪角館前從哪裡過來
自家 觀光地(地名：) 住宿場所(名稱：)
不清楚

- 2-6 角館參觀完之後接下來的預定為
回家 到別的觀光地(地名：)
回住宿場所(名稱：) 不清楚

◆請問您關於此次的角館觀光

3-1 這是第幾次來角館觀光

第_____次

3-2 從哪裡得知角館的觀光情報(可複選)

- 旅遊雜誌、導覽手冊 電視的旅遊節目 透過旅行社
仙北市觀光協會 聽以前去過角館的人說的 網站
社群網站、部落格 車站的海報、宣傳說明書 其他[]

3-3 造訪角館主要的理由(擇一)

- 武士宅邸大道(武家屋敷通り)的紅葉 興趣攝影 將資訊上傳社群網站 參觀歷史性建築物
感受小京都的氛圍 被編入旅遊團 中繼站
享受美食 以前曾經來過 其他[]

3-4 此次參觀完角館預計去的地方(可複選)

- 石黑家 青柳家 松本家 岩橋家 河原田家 小田野家 柳橋工傳承館
平福記念美術館 新潟社記念文學館 安藤龍造 西宮家 仙北市觀光資訊中心
其他[]

3-5 在角館吃了什麼？或接下來預計要吃什麼？(自由表述)

- 料理名稱 無 不清楚

3-6 買了什麼名產？或接下來預計要買什麼名產？(自由表述)

- 商品名稱 無 不清楚

感謝您的協助。

自由表述

〔活動報告〕

留学生との国際交流事業

三 浦 薫

はじめに

国際観光学科では、交換留学生の出身国である韓国や台湾、そして日本の家庭料理を作ることにより国際交流を促進する取り組みを年数回実施している。本年度は、平成30年4月に新入生オリエンテーションの企画として、新入生と交換留学生が日本の家庭料理であるカレーライスを作ることにより親睦を図る食事会を開催した¹⁾。また、令和元年12月には国際観光研究所の活動として、国際センターとも連携をとりながら、国際交流の促進を図るために交換留学生歓迎交流会を実施した。本稿はそれら国際交流事業のうち、後者の国際交流食事会の活動報告である。

1. 交換留学生歓迎交流会

この企画は、後期より来日した台湾真理大学から4名の学生を歓迎するとともに、韓国、台湾の留学生と本学国際観光学科の学生・教員が相互の文化を理解し親交を深めることを第一の目的として開催するものである。今回は秋田の家庭料理である「だまこ鍋」、韓国の「チーズタッカルビ」、台湾の「タピオカミルクティー」を作るために、食材の買出し、調理を含め留学生、国際観光学科学生が協力して実施した。日本語、韓国語、中国語を駆使して調理し、さらに鍋を囲むことで交流を深め、食後には台湾のデザートを楽しみながら懇談した。

本学からの参加学生の中には、観光奨学生として両国への留学予定者もあり、留学前の交流を図る意義が大きく、あるいは留学予定の無い学生にとっても、留学生との交流を通して国際的感覚を実践的に学ばせる目的で企画・実施した。概要は以下の通りである。

(1) 日時と会場

日時：令和元年11月7日木曜日 17時より20時30分まで

会場：東部市民サービスセンター「いーぱる」

秋田市広面字釣瓶町13番地3

(2) テーマ

秋田の家庭料理「だまこ鍋」とそれぞれの国や地域の人気料理

- ・秋田の郷土料理「だまこ鍋²⁾」
- ・韓国人気料理「チーズタッカルビ³⁾」
- ・台湾の人気スイーツ「タピオカミルクティ⁴⁾」

(3) 参加者

国際観光学科に所属する交換留学生（韓国3名、台湾4名）

国際観光学科学生10名

国際観光研究所所員

(4) 事前の準備

食事会の前日秋田市内のスーパーで国際観光研究所所員、国際観光学科生と留学生で食材の買い物を協力しながら行った。

2. 当日の様子

食事会当日は、参加学生が16時30分大学1階ロビーに集合し、大学のマイクロバスにて、会場である東部市民センター「いーぱる」に向かった。食事を行う洋室では会場の設営を行い、調理室ではそれぞれの国別に3グループに分かれ、調理を行った。秋田「だまこ鍋」チームは、だまこ用の米を炊くもの、鍋の具材である鶏肉と野菜を調理するものに分かれて準備をした。韓国「チーズタッカルビ」チームは、鶏肉の下処理から始め、唐辛子ソースを準備した。台湾「タピオカ」チームは、あらかじめ準備しておいたタピオカを茹でるところからスタートした。タピオカについては、日本の学生はなじみがあるものが多かったが、だまこについては、日本人学生さえ作ったことがあるものがほとんどおらず、すり鉢すりこ木を使って炊きあがった米を「半殺し」にする作業

を、留学生とともに楽しんでいた。また韓国料理に使用する、たくさんの真っ赤な調味料に日本人学生が歓声を上げながら調理していた。韓国留学生も、実は自分で作るのは初めてということで、スマートフォンのサイトで確認しながら調理していたのが、現代ならではの光景であった。

その後、学生の司会で食事会が始まった。お代わりをする学生も多く、和やかな食事会となった。主食件汁物のだまこ汁とボリューム満点の副菜的タッカルビ、デザート系飲み物のタピオカ、と言う正に国際的な夕食となった。食事の後は、短時間での後片付けとなつたが全員で協力し、てきぱきと終えることができた。

3. 食事会を終えて

この食事会は、日本、韓国、台湾それぞれの料理を作り、食を通じた異文化理解を図る計画であった。食事会は一回しか実施することができなかつたものの、本食事会の後、本学学生と留学生が、普段の授業、昼食、その他で行動を共にする機会が増えたようで、食事会の目的を達成することができた。

最後に、これら企画を実施できたのは、総合研究センターをはじめ、さまざまな皆様のご協力があったからにはかならない。心より御礼申し上げる次第である。

■註

- 1) 平成31年4月4日(木)に実施している。
- 2) 鶏ダシ仕立てのスープにご飯をすりつぶして丸めた「だまこもち」とキノコや野菜を加えた秋田県央地域の郷土料理である。
- 3) コチュジャンなどで甘辛く味付けした鶏肉を、キャベツやネギなどの具材と一緒に炒めた韓国料理がタッカルビである。それをアレンジしてチーズを加えたものがチーズタッカルビである。
- 4) タピオカとは、キャッサバを原料としたデンプンで、そのデンプンから作られたパール状の形状にしたものミルクティーに加えた、台湾発祥の飲料がタピオカミルクティーである。2019年に日本でも流行した。

※本稿の写真はすべて筆者または国際観光研究所員が撮影した。



写真1 辛い調味料で味付け



写真4 タピオカを黒砂糖で煮つめる



写真5 完成したタピオカミルクティー



写真2 やり方を教わりだまこを作る



写真3 だまこ鍋のおかわり



写真6 いただきます



写真 7 集合写真

國際觀光研究所 所員・研究員

所員・研究員

法学部

木 村 澄	所長・教授
塚 原 雄 二	教授
横 田 恵三郎	教授
滝 森 威	准教授（編集委員）
井 上 寛	准教授（編集委員）
三 浦 薫	准教授（運営委員）

2020年（令和2年）3月31日現在

執筆者紹介

研究ノート

井 上 寛 ノースアジア大学法学部准教授

活動報告

横 田 恵三郎 ノースアジア大学法学部教授

井 上 寛 ノースアジア大学法学部准教授

三 浦 薫 ノースアジア大学法学部准教授

表紙の写真：角館の武家屋敷と紅葉（仙北市観光課提供）

ノースアジア大学国際観光研究 第13号

I S S N 1 8 8 2 - 3 9 0 4

2020年（令和2年）3月31日印刷・発行

編集・発行 ノースアジア大学 国際観光研究所

秋田市下北手桜守沢46-1

電 話 018-836-6592

F A X 018-836-6530

U R L <http://www.nau-grc.jp>

印 刷 秋田印刷製本株式会社

North Asia University Research Bulletin of International Tourism

Vol. 13 March, 2020

CONTENTS

Special Lecture:

Considering Regional Revitalization

..... SATAKE Norihisa 1

Note:

The Practice of Tourism Education and the Realization of Universal Tourism

..... INOUE Hiroshi 17

Report:Round Table Conference with Former Students of the International Tourism
Department, Lectures by Tourism Enterprises, Workshops

—Measures for Employment Promotion of Companies in Akita—

..... YOKOTA Keizaburo 27

Overview of the 7th High School Contest “Plans to Increase Our Town’s Charm”

..... INOUE Hiroshi 37

Multi-lingual Questionnaire Survey at Samurai Residences in Kakunodate

..... INOUE Hiroshi 47

International Exchange with Overseas Students

..... MIURA Kaoru 67